コブタの真珠

かよきき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コブタの真珠

【Ｎコード】
Ｎ７５０７Ｉ

【作者名】
かよきき

【あらすじ】
才能ってなんだろう？
１４歳のフィギュアスケーター鈴原真珠は、コーチにも親にも引退勧告をされてしまう。
どうしても世界の舞台をあきらめきれない真珠はみんなに”才能”を見せれば考えが変わると考えるが・・・
努力と葛藤、笑いと涙、そして感動の本格フィギュアスケート小説
「コブタの真珠」　作：かよきき

第一話

街は夕暮れ。
買いもの客と帰宅の人々で、その駅前商店街は人ごみでごった返していた。
「うわ～ん　バナナとられた～」
子供の声に気づいた母親が振り返るとびっくりして子供を抱き寄せた。
遠ざかる猿のうしろ姿を見たからだ。

「きゃー　さ・さる！　猿ー！！」
猿は人ごみの中をすごいスピードで駆け抜けてゆく。
人々は次々に振り返るが、サルはもうどこかに消えてしまっていた。
「こんな街中に猿がいるなんて・・・」
「迷いサルって、そういえば何年か前にもニュースにあったよね」
そんな声が聞こえると、街はまた買物と帰宅の波に戻っていった。

★

『あこがれだった蒼井桜選手が正式に引退を表明した。
近年は大会に姿を現さず、マスコミもすでに次世代のスター選手のことばかり。
あの人ような演技を世界の舞台でやることが、私の夢だった。』
フィギュアスケート全関東大会　ジュニア部門。連盟非公認ながら全日本予選の前哨戦として出るものも少なくない大会だ。

ポニーテールが優雅になびいている。
１４歳の鈴原真珠（すずはらまじゅ）の演技は佳境に入っていた。
ゆったりとした曲調の中、真珠はスピードをあげ前向きのまま全身の神経を左足かかとに集中させ、一瞬ブレーキをかけたように見えるやいなや跳んだ。
『２Ａ（ダブルアクセル）＋３，５０』
真珠の頭の中はまるで、電卓を叩いているかのように数字のイメージが支配していた。
２回転半をキレイに回り右足の着氷も決まる。そのまま右足を使ったコンビネーション。

『２Ｔ（ダブルトゥループ）＋１、３０』

これもキレイに決まった！優雅に両手を広げ成功をアピール。

『よし！　計算通り！　』

後はファイナルに向けステップで無難につなぐだけ、大技を終え真珠は少し余裕の笑顔を見せた。

「やるわね。真珠ちゃん、ジュニア選手にしたら完璧な演技だわ。」

真珠の所属している縦浜市スケートクラブの相沢コーチはリンクの際で腕組みをしながら感心していた。真珠専属コーチの松山は持っていたレポートを相沢に見せる。

「それだけじゃないのよ。　見て、試合前に真珠が持ってきたの」

相沢はそのレポートを見て驚く
「何コレ？順位予想・・・1位から10位まで選手・・・て！！
何コレほとんどぴったりじゃん！」
その紙には、1位から10位までの選手の名と技術点と構成点の予想が書かれてあり、そのほとんどが当たっていたのだ
「あ・・・IDスケート・・・すご・・・」
相沢はそのレポートに魅入っていたが、専属コーチの松山に笑顔は無かった。
鈴原真珠は予想、いや計算通りでこの大会を優勝したのだ。たくさんの観客の歓声と拍手の中、表彰台に上る真珠。そして、その顔にも笑顔は見られなかった。

★

まだ街は静かに眠り、東の空はすこし紺色に近い青みがかっていた。
リビングの時計は4時3分。テーブルの上には湯気が立ち上るコーヒーとトーストが二枚、ちぎったレタスとスライスされたトマト、ゆで卵も添えてある。
壁側の大型テレビは、朝のニュースだ。この時間は新人アナウンサーの練習の場なのか、読み方がどこかたどたどしい。
「さて、続いて迷い猿の続報です。先日から各地で猿を見たという人が相次ぐ中、昨日、午後五時ごろマチダ駅付近でまた猿が出現したとの情報が入りました、子供から食べ物を奪うなどの被害が出ているとのことで、警察は山から降りて戻れなくなったハグレ猿では

ないかと見ていますが出現場所がバラバラで捕獲は難航している模様です」

その太い腕でコーヒーを持ったまま鈴原正則（４２歳）はニュースを聞いてうすら笑いを浮かべた。

「都会でサルか・・・」

後ろの方で階段を下りる音がする。正則は椅子の背もたれに腕をかけつつ振返る

「おはよう真珠　いつも早いなぁ　」

鈴原真珠がトレ　ードマークのポニーテールを結びながらリビングに入ってくる。演技や練習の時は選手は普通、長い髪はポニーテールなどにしてまとめておく。回転の時に視界の邪魔になるからだ。その分、それ以外ではリラックスするようあまりまとめない人が多いが真珠は、リンク以外でも常にポニーテールにしている。すでに制服姿だ。

「お父さんこそ　今日は早いね」

「ん？　ああ　たまにはな」

フィギュア選手の朝は早い。午前五時にはリンクで朝錬があり、その後直行で学校に行くと帰りにまたリンクに戻り帰宅は夜十時近くになる。学校の時間もあるが夏休みでも昼間は一般客がリンクを使っていることが多いため、しっかりと練習をするのにはそういう時間割になるクラブが多いのだ。

キッチンの明かりも点けず真珠は冷蔵庫から牛乳をだしグラスにそそぐ。

「朝メシは？　食べていかないのか？」

おそらくテーブルの上に載っている食事は自分ために正則が作ったものだ。一瞬ためらいながらも、真珠は牛乳を一気に飲み干した。こういう時の正則は何か嫌な話をする前兆なのだ。

「ごめん。いらない」

牛乳が口のはじに少しこぼれた。拭くものを探しあたりを見回す。はやくこの場を出たい。

だが、正則は持っていたコーヒーをゆっくりとテーブルの上に置き、唐突に切り出した。

「真珠・・・そろそろ潮時じゃないか？　」

キッチンの手拭で口を拭いていた真珠はその言葉に動きが止まる。

「才能のいる世界だし・・・残れる子はお前の年には7級を持ってるそうじゃないか」

リビングに点いている明かりが真珠の背中だけにあたって真珠の表情は見えない。

「来年は受験だ。お前は頭も良いんだし、スポーツなら学校の部活でも充分じゃないか・・・それともまだ続けたい、特別な理由でもあるのか？」

正則はバツの悪そうな表情で語る。
真珠は持っていた空のグラスをギュッと握りしめた。

「太るから・・・・」
「あ？」

以外な返答に正則は固まる

「私、将来絶対太るから！　お父さんもお母さんもおじいちゃんもみーんなデブだし！今の内に”氷上の美　ＮＯ１っていう称号が欲しいのよ！！　悪い！？　」

真珠は怒りの表情で正則をにらみつけ、グラスを流しに置きドスドスと歩きリビングを抜けワザと大きく音が出るようにドアを閉めた。

「デブ・・・・」

正則は固まったまま呟いた。

★

始発のバス。　さすがに乗っているのは真珠だけだった。窓には１０月も終わりに近い誰も歩いていない早朝の住宅街が流れていく。真珠はボーっととそれを眺めながら、幼い頃のことを思い出していた。

あれは何歳の時だったか。ちいさい時テレビで見た冬季五輪だった。
天才、蒼井桜・・・あの息をのむ
［ショパン　第二番変ホ長調　ノクターン］
生まれてはじめて鳥肌がたった瞬間だった。
『この人みたいになりたい！』
私はすぐに両親にせがみフィギュア教室に通い始め、必死に練習をした。
でも物覚の悪い私はついていくのが精一杯。転ぶ回数も一番多く、いつもみんなに笑われていた。
だから私は・・・”考える”ことにしのだ。
学校にいるときも、家に帰ったときもフィギュアスケートのことを必死に勉強した。何冊も本を読み、何回もビデオを見た。
ディープエッヂとは何か？　美しいポジションとは？　要素の配分は？　どうしたら試合で点がとれるのか？　どうしたら勝てるのか？
どうしたらあの蒼井桜のようになれるのか・・・・
・・・でも、そんな努力をよそに、ノービスを卒業するとき言ったコーチの言葉は・・・
「え？　真珠ちゃんも進級テスト受けるの？」
気づくとバスは降りる停留所のすぐ近くまで来ていた。あわてて真珠は”次止まります”のボタンを押した。

★

リンクはコーチもまだ来ていない時間。最近はこっそり暗証番号を教えてもらった関係者口から入ることにしている。更衣室に直行し練習着に着替えシューズの紐を縛る。腕や足など柔軟運動を軽くしながらいつも通りスケートリンクのドアを開ける。

シャゴッ！

真珠はまだ、明かりもついていないリンクの中で、誰かが先に滑っていることに気づく。
いつも自分が一番乗りなのに、こんなことは初めてだ。とりあえず証明のスイッチを入れに行こうとしたとき薄暗い中で先客がジャンプを跳んだ。

『３Ｆ（トリプルフリップ）！』

暗くて良くは見えないが着氷は決まっている、そして間髪入れずジャンプが続く

『３Ｔ（トリプルトゥループ）！！』

また　キレイに着氷した。真珠はリンクのへりにかぶり付いた。

『３Ｆ＋３Ｔのコンビネーション　基礎点９，５０の大技。　ウチのクラブにシニアレベルのこんなコンビネーションジャンプを跳べる人がいるなんて・・・しかも　上手い！　』

真珠は先客の正体が気になった。もし同世代なら協力なライバルだ。

バリン！

自分も中にリンクに入ろうと入り口に近づいた時、誰かの忘れ物か、落ちていたシューズのブレードカバーを踏んで割ってしまい大きな音をたててしまった。
その音に気づくと先客はびっくりたように真珠とは反対方向に逃げていく

「え？　ちょっとあなた・・・」

真珠が慌てて声をかけるがもうリンクの外にいるようだ。
そのとき、ぱっとリンクが明るくなる。

「あら　真珠　おはよう　いつも早いわね」

松山コーチや相沢コーチが他の生徒たちと共にリンクに入ってきたのだ。
真珠は必死に探すがもう先客の姿は見当たらない。

「あ、あの今、私以外の人　見ませんでした？」
「何それ？　幽霊？」
「コワーイ」

コーチたちは意味がわからないようだった。
真珠はゆっくりとリンクの回りを見回しながら歩くと、また何か踏んだ。足元を見るとバナナの皮を踏んづけていた。

「なぜ、バナナの皮がこんな所に・・・」

拾いあげるてゴミ箱に捨てた。

小さい子がどんどんリンクに入る中、真珠は念入りに柔軟体操をする。

「いよいよ　ブロック予選ね」

松山コーチがグランドコートのポケットに手を入れながら真珠に近づいて言った。

ブロック予選とは、全日本ジュニア選手権の一次予選のことで、地方ごとにブロック分けされておりその上位成績者が二次予選の東日本ジュニア選手権か西日本ジュニア選手権に出られる。更にそこで上位何位かに入るか特別枠で推薦されると、全日本選手権に出られるのだ。世界を目指す位置に行くにはこの大会で勝ち抜くことは必須条件であった。

真珠はコートのポケットに入れてあった紙を松山に渡した。

「先生、これ明日の大会の予想です。」

真珠は柔軟体操を続けながら話した

「１１２点。　他選手の個々の上達率、傾向、実力など加味してみて予選では１１２点取れば優勝できますから。」

真珠に表情はない。変に表情を出せば会話が続いてしまう。早々と柔軟体操を終えコートを脱ぎブレードを外し、リンクに一歩入た。

「すごいね　真珠。　やっぱり学校の成績も良いんでしょ？」

★

真珠の想いもよそに松山は会話を続けた。”来た”真珠には松山からこんな話が来ることがわかっていた、だからここしばらくは必要以上に松山と会話をしたくなかった。

「もったいないよ・・・こんなに、その・・・・勉強や研究に才能があるのにフィギュアばっかりやってたら・・・」

松山も下向きで真珠にもらった予想を見ながら話している。たぶんつらそうな顔を見られないようにいているのだ。
真珠はこわばった。口をつむぎ、目を力いっぱい閉じて我慢した。だが爪が手の平を貫きそうなほど拳に力が入っている。要するに今朝、父親にされた話と同じ内容だ。

『お前は才能がないからさっさと辞めなさい。』

親からもコーチからも認めてもらえない。そして今まで人一倍頑張ってきた”考える”ことさえも今、否定されているのだ。１４歳の真珠にとって耐え切れない台詞だった。

「わかりました。　もし今度の大会優勝できなかったら私・・・・フィギュア辞めます！！　」

松山に背を向けたまま真珠は切り札のようにその言葉を吐き出した。この宣言をすれば、とりあえずしばらくはこの耐え難い台詞から逃れられる・・・
と思っていた、だが言った瞬間に深く後悔も襲ってきた。

「え、　真珠！！　私そんなつもりで・・・」

真珠は松山の言葉をそれ以上聞かず練習を始めた
松山は予想の紙を思わず握り締めていた。大きなため息をもらす。
やりとりを聞いていた相沢コーチが急いで松山の元にきた。

「バカ　何も大会前にあんな事言う必要ないでしょ！！」

相沢は真珠の気持ちを察して完全に怒っている。

「だって、あなたにだってわかるでしょう・・・」

松山は悲しそうに、握りしめてくしゃくしゃになった予想の紙をのばした

「あの子はもう”伸びない”　一歩手前まで来てる。　だったら今のうちに、フィギュアを大好きなうちにキレイに終わらせてあげたいのよ」

伸ばした紙を丁寧にたたんでポケットに入れた。相沢も大きく鼻息をだした

「残酷だよなフィギュアスケートって・・・小さい可能性にかける

には金がかかりすぎる。そして大切な１０代の時間も根こそぎ使ってしまう。そのくせ世界の舞台に出られるのは、ほんの１０数人、１大会に２人か３人・・・才能の無い者は去るしかない・・・」

リンクの中に真珠も含めてたくさんのスケート靴の出す氷を削る音がこだましていた。

★

生徒たちのじゃれあうようなザワメキが、いつものように聞こえつづけている。

校庭では様々な部活が準備をはじめた。

放課後。

真珠は前から二番目の窓際の席で居眠りをするように腕組みを枕に机に頭をもたげていた。窓の外でトンビが一羽、遠くの空で旋回していた。この辺には割りとおおい。窓越しの空を見ながら呟いた。

「私に・・・いったい何が足りないんだろう・・・」

もう何年も何回もこの言葉を真珠は頭の中で囁きつづけていた。

だんだんと生徒が教室を出て行く。真珠もだるそうに腰を上げ鞄を肩にひっかけた。

『世界大会デビューはあの時見た蒼井桜と同じ”ノクターン”て決めてたのにな・・・』

オレンジが強くなった午後の光が廊下を照らす。みんな楽しそうに

忙しそうに下校や部活をしている。今日は特に足が重い。親からもコーチからも”選手生活はそろそろ終わりだ”と引退勧告を渡されたのだ。

真珠だって一生氷の上で生きていけるとは思っていなかった。でも真珠にはまだフィギュアスケートの中で納得というものをしたことがなかった。こんな形で、まわりにじわじわと締め付けられながら、まるでタイムアップが来るように辞めることは絶対にしたくなかった。

トボトボ歩いていると一年の時担任だった国語の小粥先生が帰りの挨拶をしてきた。
さばさばとした男っぽい先生だ。

「さよなら　鈴原！　あ、そういや明日大会なんだって？　先生も見に行くからな気合入れていけよ。」

小粥先生はニンマリとしながら鈴原の肩を抱いて激励した。真珠は自然とため息が出てしまった。真珠の様子に小粥は気づいた。

「どうした？　怪我でもしたのか？」
「先生・・・才能って何なんですかね・・・・」

唐突な質問に小粥先生は言葉に困った。

「えっ、えっとー　お前突然難しいこと聞くなぁ　んー」

口元に手をやり目をきょろきょろさせばがら小粥先生は考えていた。
真珠は質問したにもかかわらず返答にまるで期待してなかった。すみませんと言って帰ろうとしたとき、小粥先生は返答した。

「一口には語れんが、才能なんて変に追い求めるもんじゃないんじゃないか？　要は結果でわかることだからな。それに昔から”天才”なんて呼ばれた大抵の偉人たちは、その才能のため変人、偏屈扱いされて幸せな人生なんて送ってないってのが常だし」

真珠にはその言葉の意味がよくわからなかったが、才能を持っていて苦労するなら喜んで苦労してやると思った。真珠の目は自然と伏し目で廊下を見つつ歩きだした。

「・・・どーも」

小粥先生はその姿を見て頭をかいた。

「うーん、あえて言うなら、才能ってのは奇抜な・・・その・・・」

小粥は閃いたように壁をたたいた。

「うん！　凡人の予想を裏切ることなんじゃないのか？」

真珠は足を止め、目を見開いた。振り返り小粥先生に深々とおじぎをした。

『予想を裏切る！　』

何かが閃きそうな感じ。真珠の頭の中はピカピカ何かに照らされた

ような感覚だった。

★

１０月の夕方は早い。西の空がだいぶ赤くなり始めていた。
明日は予選なので、夜の練習はせずに体を休ませることになっていた。久しぶりに家まで直帰する通学路を真珠は呪文のように呟きながら歩きつづけた。

「予想を裏切る。　予想を裏切る・・・」

さっきはあんなに、ひらめいた気きがしたのに、全然答えが見つからない。逆に悩みはじめてしまった・・・

「予想ってどうやって裏切るの？」

一瞬、また小粥先生に聞こうかと立ち止まってしまった。そこは木の多い森林公園の前で歩道の前は腰の高さ程のつつじが５０メートルほど続いていた。

その時、足元でガサガサとつつじの茂みから聞こえたと思ったら突然！！

にゅっと手が現れ真珠の左足をつかんだ。　真珠はとっさに左足の方の茂みを見た。そして目を見張った。

顔の上につつじの葉がたくさんついた、泥だらけのサルと目があった。

「ぎゃー！！　サルー！！！！！」

真珠は大声で叫び、サルの手を振り払いその場から逃げ出した。

「ま、待ってぇ～」

真珠は大きく口を開けたまま立ち止まった。”待って？”人間の言葉だ。

「この辺りに・・・すずはら・・まじゅ・・ちゃんて人すんでいませんか？・・」

サルが人間の言葉を話して自分を探してる？

きゅるきゅるきゅるるるる～

倒れたままのサルのお腹から大きな音が聞こえる

「あ、あんた誰・・・！」

サルがまじまじと真珠の顔を見た。

「もしかして・・・コブタちゃん？」

サルの言葉に真珠は固まった。

（続く）

第一話（後書き）

「コブタの真珠」を読んで頂き本当にありがとうございます。
この物語は全１１話で構成されています。
是非最後まで、読んでみてください☆

第二話

「もしかして、コブタちゃん？」

その正体不明のサル・・・のような娘に”コブタちゃん”と呼ばれ、動きが止まる真珠。

『コブタちゃん・・・コブタちゃん・・・コブタちゃん・・・遠い昔にそんな名で呼ばれていたような・・・』

真珠は思い出したくない記憶を封印した記憶の金庫を解禁した。

うっすらと頭の中に浮かんできたのは、リンクの中だった。何年前のことになるだろう。フィギュアスケート教室に入って何ヶ月かそこらかだろうか。　フィギュア教室・・・と言ってもリンクの中なので氷の上だが、そこには工事でよく見かける赤い三角錐のコーンがいくつも並べられ、子供が何箇所かに分けられていた。真珠はいつも入り口を入って一番右端で滑っていた。一緒に入った子たちの中には左の方に移っていく子も沢山いた。

「先生・・・なんで私はあっちに行っちゃダメなの？　真珠もあっちに行って滑りたい」

「もう少ししたらね　頑張って行けるようになろうね！」

その頃から真珠を教えていた松山コーチは困ったような顔をして言った。

「バーカ　こっちは上手い人専用のエリートコースなんだよ！　お前みたいなデブの豚子はムリムリー」

意地の悪い男の子たちがスイスイ滑りながら真珠をからかった。この頃の真珠はチビでコロコロしていてよくからかわれる対象だった。

「♪ブーブー　ブタコ！　ブタコ！　ブタコ！　ブー　ブー　ブー♪」

いじわるな歌にいつも真珠は涙をためて怒った。

「ブタコじゃないもん！！　ブタコじゃないもん！！」

泣きわめく寸前、割って入ってきた子がいた

「やめなよ！！　”コブタちゃん”だって才能ないのに一生懸命頑張ってんだから！！　人の気持ちも考えなよ！！」

グサリ。とその子の言葉の方が真珠のプライドは深く傷つけられたのだが、助けられたような気もするし複雑な気持ちだ。

「コブタちゃん。あんな子たちのことなんて気にしちゃダメだよ？　それじゃ私はアッチ側だから」

そう言うとスイスイとエリートコースの方に向かうその子。

名前は・・・・たしか・・・・

真珠は我に返ってその子の名前を思い出した。

「かえで！　あんた中山　楓？」

そのサルのような少女はピクピクしながら力なくうなずく、だいぶ衰弱しているようだ。
真珠はそのサルが楓だとわかると恐る恐る近づいた。

「でも、あんた確かどっかに引っ越したんじゃ・・・」

楓は全身茶色の着ぐるみのようなつなぎをきてご丁寧に大きい耳までつけていた。

「楓？」

楓は反応をしなかった。真珠はびっくりしてとっさに楓を抱き上げた。

「楓！？　ちょっと　だいじょう・・・・クサっ！！！！」

むお～んと鼻をつんざく異臭。１４年生きてきてここまで臭いのは初めてだ。思わず楓を突き放してしまう。

「し・・・しどい」

楓は小さな声で呟いた。

★

すでに東の空は闇に沈んでいて西にすこし赤みが残り建物のシルエットをくっきり映し出している。真珠の家は昔は山だったところを分譲して住宅街にした場所でなだらかな坂の上の方に立っているので、夕暮れ時などは街が美しく感じる。

「ふわあぁぁぁ☆」

お風呂に入れ、キレイになった楓は食卓に並べられた夕食に釘付けだ。今日は真珠の母の得意料理、煮込みハンバーグだ。ソースは干しぶどうが隠し味だ。茹でたじゃがいもの皮を剥き、粗くきざんでニンジンとキュウリとマヨネーズを和えたポテトサラダと絶妙に合う。

「これ　食べていいの？」

楓はまるでお預けを待っている犬のように鼻息を荒くして真珠の母に聞いた。

「もちろん！　たくさん食べなさい」

キッチンで野菜スープの火を弱めながら真珠の母は優しい声で答えた。

「頂きます！！　ギャー美味しい！！　むぉぉぉ　米！　白い米だぁ～♪」

楓は凄い勢いで食べ始めた

楓はよほどお腹が減っていたのか、ハンバーグの中心を箸で刺して持ち上げ大きく歯型くっきりつくほどバクつき、いっぱいの口の中へポテトサラダを詰め込んだ。真珠の母親が後に出来た野菜スープを置くとすぐに皿ごと口に運び、ハフハフ言わせながらハンバーグとポテトサラダを喉に流しこんだ。と思ったらハンバーグの皿にご飯と残りのハンバーグを入れ、再び口にカキこみはじめた。

「ほばさん　ほはわひ　（おばさん　おかわり）」

一瞬で何もなくなった茶碗を真珠の母親に渡すと、景気良く食べる

楓に気持ちよさそうにニコニコしておかわりのご飯をよそった。
キッチンの一人大食い大会の後ろで続き部屋のリビングで真珠はソファーに座りノートパソコンを開いていた。楓を風呂に入れたので真珠も風呂上りで髪を下ろしている。

『まったく・・・明日は大事な日なのに・・・　変なの拾っちゃったわ』

うるさそうに楓を横目で見るが、すぐにパソコンに目を戻した。

『なんとか明日からのブロック予選でコーチ達の予想を裏切る演技をしなくちゃ・・・でもどうしたらいいんだろう・・・』

真珠のパソコンでフィギュアのサイトなどを検索しまくっていた。なにか新しい、自分の思いつかなかったような発想が隠されていないか必死で探していた。だが世の中そんなに甘くない。真珠はため息をつきはじめた。

「楓ちゃん　このバッグも洗うわよ・・・うっ　臭っ・・・？
あら！」

真珠の母親は食事の世話を離れ、汚れきった楓の荷物を洗濯しようといた。
そのボロボロのバッグの中にフィギュアスケートの靴が入っていた。

「楓ちゃんもフィギュア続けてたのねぇ」

鼻をつまみながらスケート靴を母親は出した。

「うん！　今度初めて大会に出るの！」

まだ食事中の楓は、沢庵を箸で挟みながら答えた。

真珠は驚いて振向く。

「え？！　大会って、この時期に大会ってもしかしてブロック予選？」

「うん！！　コブタちゃんも？」

楓はうれしそうに楓の方に乗り出した。が、挟んでいた沢庵が落ちるとすばやく空中で口でキャッチした。

真珠は目を丸くして楓を見た。

『へー、てことは楓も６級持ってるんだ。フィギュアのバッヂテストは６級から「特別テスト」と呼ばれるくらい難易度が増す。ほとんどの子があきらめて私のクラブでも現役で６級取ってジュニアに進んでるの私だけなのに・・・』

ちなみにフィギュアスケートの大会は１３歳まで４級以上をノービス大会。１３歳以上１８歳以下で６級以上でジュニア大会。１５歳以上で７級以上でシニア大会と言い、テレビでやっているような大会はほとんどがシニアの大会である。

真珠はパソコンを閉じて食卓についた。

「・・・ていうか、あんた。なんであんな所で行き倒れなんてしてたのよ。」

箸を持ち野菜スープだけを皿によそった。

「あのね。フィギュアスケートって音楽を体で表現するでしょう？
だからいろんな事を知らないとダメだって先生が・・・」
「ま・・まぁ、それはそうかもね」

野菜スープはキャベツ、ニンジン、たまねぎ、ベーコンが食べやすい大きさに煮込んであり味付けはコンソメであっさりしている。真珠はその中のベーコンを皿から出した。

「それでね。楓、動物の気持ちがわかりませんって先生に言ったの。そしたらね・・・」
「え？　動物？　なんで動物？」

真珠の質問を聞こえなかったかのように楓は話を続けた。

「《じゃあ、人間に一番近いサルの気持ちだったら、わかりやすいんじゃないの？》って先生がいうからぁ　ちょっとサルになって暮らしてみようと思って・・・」

楓は得意気に笑った
真珠は楓の変人ぶりにあきれておでこに手をやった。
昔のことを思い出した。

時にはお花の気持ちがわからないと言って一日中、動かず太陽の手をかざしていたり・・
時にはカラスの気持ちがわからないと言ってリンクの屋上から、飛び降りようとしてみたり・・・（その時はさすがに真珠が止めた）
時には猫の気持ちがわからないと言ってリンクの近くで一番凶暴な野良猫と本気でテリトリー争いをしていたり・・・
数々の変人伝説は数えあげたらキリが無い。

『そうそう、”そういう”子だった。変わってないなぁ』

真珠は大きくため息をついた。

楓は話を続けた。

「それでね、しばらくサル山で暮らしてたら、どこにいるか何処にいるかわからなくなっちゃって・・・意地悪なおじさんは怒るし（作物を勝手に食べたから）、お巡りさんは追ってくるし（ゴミ箱を漁っていたから）・・・お腹が減って、本当に死ぬかと思って・・・怖くて・・・そしたらコブタちゃんを見つけて・・・」

楓は目をウルウルさせ箸を持ったまま真珠の手を強く握った。

「コブタちゃんは命の恩人ですぅ！！　一生ついていきますぅ！！」

「来るな。」

真珠はヒキ気味で呟いた。

「あ、でも一回は帰らなきゃ。大会も来月くらいから始まるし・・・」

楓はかわいげに人差し指をアゴの下に置いた。

真珠は呆れて楓の肩にゆっくりと手をやった。

「大会・・・明日からだよ。」

ぷーっと楓は吹きだした。

「もー　コブタちゃーん　今まだ9月初め位でしょー　ププププ♪」
真珠はカレンダーを指差した。力いっぱい。弱い子でもわかるように。
「今日は１０月６日。」
さすがに楓の顔がみるみる青くなる・・・
「ウッキャッキャッキュウー！！（※サル語　どうしようー！！）」
真珠は大きくため息をついた。

★

楓は電話を前にして大きく深呼吸をした。
ピ・ピ・パ・ポ・・・・電話番号は暗記してるらしくスムーズに押している。
［プルルル・・・プルルル・・・ガチャ］
電話の相手が電話を取った音だ。
「あっ　先生？　か・・・楓です☆　お・お元気ですか？」
受話器のコードをクルクル指でひっかけた。
［バカモノ――――――！！！！！］

まるで受話器から”バカモノ”の文字が具現化して楓のほっぺたに衝突したような衝撃。
真珠は何も言わず再びパソコンを開いていた。

「え？　練習？　や・やってます。やってます。　ホントに跳べてます　ハハハハ」

楓の乾いた笑いでごまかした。

『サル山のどこで・・・？』

真珠はカシャカシャとソファーでキーを打ちながら思った。

「迎え？　だだだ・大丈夫ですよ！　親友のコブタちゃんも明日大会に出るんで一緒に。はい！　明日！！」

ガチャリ！　「ふー」楓は額に出た冷や汗をぬぐった。

「”ふー”ってちょっと！　アンタ泊まってく気？　私だって明日の準備が・・・」

アワてて真珠はソファーから立ち上がった。

「だってー　先生怒ってるんだものー」

楓はちいさな子供のように泣き喚いた。

「怒られろ！　当たり前だろ！」

真珠は大声で怒った。
真珠の母が洗濯機を回してリビングに戻ってきて口をはさんだ。
「まーまーいいじゃないの真珠、もう晩いんだし・・・」
やさしく楓の頭をなでた。
「そうだよぅ　一緒にピロートークしようよぅ　コブタちゃん☆」
「するか！　てゆうかコブタちゃんて呼ぶな！　」
真珠は結構本気で怒っていたのだが、楓には全く伝わっていなかった。

★

真珠の部屋は階段を上がった所すぐの部屋だった。
「カー　コー」
楓は横になるとすぐに寝息を立て始めた。しかも用意された布団ではなく、真珠のベッドでスヤスヤと。真珠は気を使って部屋の電気を消して机でパソコンだけつけていた。
「まったく　いい迷惑な・・・」
ベッドの楓をチラッと見た。
検索サイトで”中山　楓”を検索する。　しかし一切、情報は出てこなかった。

「本当に初めてなんだ・・・ノービス（主に小学生の大会　４級以上）のデータも全く無い。　初出場の人なんてマークしてないから知らなかった」

パソコンの電源を切る。もういい時間だ。明日のためにも睡眠時間もしっかり取らなければならないと思った。
ゆっくりと電源が切れていく中、朝、コーチに言ったことを思い出した。

『わかりました。　もし今度の大会優勝できなかったら私・・・・・フィギュア辞めます。」』

パソコンのモニターが消え目に残像が残る。部屋の中が真っ暗になる。

「計算通りなら予選での優勝は可能・・・・。　でもそれだけじゃコーチも親も認めてくれない・・・”才能”を予想を裏切る何かを見せないと・・・」

椅子を静かに戻すとすぐ後ろにひいてある客室用の掛け布団をめくる。客室用は妙に湿り気があり重い。目が慣れてきてうっすら楓の顔が見える。真珠はクスッと微笑んだ。

「この子はある意味、予想外の事ばかりしそうだけど・・・”サルダンス”とか」

楓は口を開けて寝ている。
真珠もアゴのあたりまで深く布団をかけた。

サル・・・

目を閉じて寝る事に集中した

サル・・・

その時、朝みた映像が蘇ってきた。

それはなぜかリンクの通路に落ちていて踏んでしまったバナナの皮。

真珠は閉じた目をぱっちりと開けた。

「まさか・・・」

そのバナナの皮を踏んだのは、真珠より早くきて練習していて、真珠の気配に気づいて逃げるように消えてしまったあの正体不明の人・・・

「まさか・・・」

その人は３Ｆ＋３Ｔ（トリプルフリップ・ダブルトゥループ）の基礎点９．５のシニアレベルコンビネーションを決めていた。今のクラブには自分以外でジュニア以上の人はいない。

「まさか・・・・！」

そしてさっきの楓の電話の会話を思い出した。

『え？　練習？　や・やってます。やってます。　ホントに跳べてます　ハハハハ』

真珠は上半身を起こし楓の寝顔を凝視した。

「あれ・・・楓？」

せまい六畳の闇の中、楓の寝息だけが聞こえる中、ほのかに緊張感がただよった。

★

なんとなく昨日より寒くなった気がする朝。
今日、真珠と楓はフィギュアスケート大会ブロック予選に出場する。
あまりに汚かった楓のサルの着ぐるみは物干しで乾くのを待たれ、真珠の服を楓は借りて着ている。タータンチェック柄のスカートと白いワンピース、一瞬どこかの制服に見える。２人は玄関で靴を履いていた。

「じゃあこれ、お弁当ね。楓ちゃんの分もあるわよ　一人四段重ねよ」

真珠の母親は得意気にわたした。

「だからいつも量が多すぎるのよ」

真珠の迷惑そうな顔の横でうきゃーとキラキラ瞳を輝かせてよだれをすする楓がうれしそうに受け取った。

「真珠。」

真珠が声のした方に振り返ると、一階の寝室のドアから父、正則が顔をだしていた。

『そろそろ潮時じゃないか？』

昨日の記憶が蘇る、真珠は一瞬緊張した。

「頑張れよ。」

緊張していた真珠の体から力すーっと抜けた。

「あ、当たり前でしょ！　」

真珠は楓と共に玄関を出た。

『本当はわかってる・・・お父さんもお母さんも、コーチだって本当は私に勝って欲しい・・』

バス停にいつものバスが来ていた。
楓が居る分、いつもより今日は少しだけ遅れていたが毎日のる真珠を心配して待っていてくれたのかもしれない。乗るとき、運転手は二コリとした。

『誰もわざわざ悪意があって自分を邪魔する人がいるわけじゃないんだよね』

いつものバスから見る景色が妙にきれいな気がした。

★

バスは順調に駅についた。楓は大事そうに弁当を両手で持ちながらバスを降りた。真珠は初めて運転手に会釈をしてから降りた。父親のエールと運転手の笑顔に真珠はやる気が出てきた。

そうなると気になるのは目の前で弁当を抱えて歩く楓だ。とにかくノーマークなのだ。どんなことでもデータが欲しいとおもった　。真珠はターミナルから駅ビルに向かう赤信号でそれとなく探りをいれてみることにした。

「ねぇ　楓。その・・・今日のショートは何の音楽でやるの？」
「？　曲名？　わかんない・・・コブタちゃん曲名覚えてるの？　すごいねー」

楓はマジマジと真珠の顔を見るとにっこりと笑った。真珠は目を細めて引きつった笑顔を返した。よく考えてみれば楓は一ヶ月以上もサル山で生活し、家にはおろかコーチとも会っていないのだ。もしかしたら綿密な打ち合わせなどをしないまま、前回のプログラムで大会に臨むのかもしれない。

「じゃぁ・・要素は？　ジャンプとかステップとか・・・」

さらっと重要な質問をしてみた。要素さえわかれば技術点の基礎点くらい計算できるからだ。

「えーっと・・・」

楓は弁当を片手に持ち替え右手の人差し指で額をつついた。

真珠は息をのむ。

「3アヒル＋2カルガモ、2スカンクジャンプ、ふわっとフラミンゴスピン、サルダンス、リスダンス、トリプルカルガモ、ネコ＋イノシシスピン・・・とかかな？」

「暗号かよ！！」

思わず大声でつっこんでしまった。他の歩行者が真珠を見る。すこし小さな声で楓に囁いた。

「ルッツとかアクセルとか、そういう呼び方があるでしょう？」

「えー楓、そっちの覚え方してないからぁ・・・」

問題のわからない子のように困った顔をする楓。信号は青に変わり、ゆっくりとみんな歩きだす。

「あんた今までどんなレッスン受けてきたのよ」

呆れため息まじりの本音だった。

「うんとねーあんまり日本にいなかった。」

その言葉に再び真珠は楓を見る

『か・・・海外留学？！　超エリートじゃない！！　』

だとすれば、相当高度なレッスンを受けてきたのかもしれない。クラシックバレエなどを取り入れ指先、足先までの表現を身に着けるシニア選手も少なくない。まして海外となれば有名で優秀なコーチ

が山ほどいる。

「どこ行ったの？　ロシア？　アメリカ？」

一段飛ばしで階段を上がる楓に追いつきながら真珠は質問を重ねる。

「アフリカとかブラジルとかぁー☆　あー懐かしいなぁ　象に踏んづけられそうになったなー　そうだ！楓、ライオンに追いかけられたこともあるんだよ！」

「うそをつけ！！　フィギュア関係ないじゃん　」

真珠は再び大声でつっこんでしまった。

「本当だよぉ？　これがその時の爪あと。」

楓は左脇の背中を見せると確かにそれらしき傷跡がある。

『も・・・もしかして手の内隠されてる？』

真珠は楓を疑ったが、そんな器用な子ではないことはよく知っている。

「学校は？　あんた私と同い年でしょう？」

「学校？　やだなー。ちゃんと卒業したよ。アンゴ●・チョクウェ族の小学校！　日本とはちょっと学科が違うけど、呪術とか儀式とか」

「ちょ・・・うぇ・・・？」

真珠は楓の言っている部族の名前さえ聞き取れずイライラした。

「あー日本の学校懐かしいねー　苦労したなー　九九とか・・　にんがし、にさんがろく、にしがきゅう、にご・・・にご・・・・」

楓は頭が痛くなったような錯覚に陥った。

『これ以上詮索するのはやめよう・・・一人で集中してた方がマシだ』

楓に切符を買ってやりホームに降りる。早朝だが、まばらに人がいた。

「で？　コブタちゃんは何をやるの？」

楓は静かになった真珠の肩によりそって話しかける。真珠は迷惑そうに肩をその分ずらす。

「ショートはチャイコフスキーくるみ割り人形の［花のワルツ］」

「へーどんなの？　どんなの？」

楓がうるさく聞く。真珠はバッグから音楽プレーヤーを取り出した。

「聞く？」

「聞く！　聞く！」

少しは静かになるだろうと思い、楓にイヤホンをはめて再生をしてやった。

楓の耳の中で音楽が始まる。

楓は本当に静かになり音楽に聞きいった。

「うわぁ　いい曲だねぇ・・・」

真珠が楓の顔を見ると頬がかすかに紅潮していた。興奮しているのだ。と思いきやいきなり楓は両手を大きく動かし踊りだした。

『お・・・踊りだすか　普通？！　』

真珠の方が恥ずかしさで顔が真っ赤になっていく。

しかし、楓は本域で踊りだす。まるで氷上のようにクルッ回転したりした。

あまりに気持ちよさそうに踊る姿に真珠は楓を止められなかった。

一瞬」、幼いころの楓と今の楓が重なる。

『この子、本当に小さい頃と変わってない・・・』

楓の踊りをまばらながらもホームの人が全員見ていた。しかし誰も嫌そうな顔をしなかった。それほど楓は無邪気で無垢に見えた。

「楽しそう・・・」

真珠はうらやましそうに呟いた。その時”電車が着ます”の看板が点きアナウンスが流れはじめた。真珠はあわてて楓のイヤホンを外し楓を止めた。

「ほら、」電車が来るから・・・」

「あ・・・うん」

楓は大人しくイヤホンを外され地面に置いた弁当を再び大事そうに両手で持った。

「ほぉー・・・」

楓が熱のこもったため息をひとつついた。

「すーっと踊っていたい・・・」

なにげない一言だった。真珠にとってその言葉は自分の心境とぴったりだった。

ゴーっという音ともに列車がホームに入ってくる。

「・・・・・そうだね・・・」

列車の風圧でなびく髪が目に入らないよう、こめかみ辺りで押さえながら真珠は素直に言った。

★

土曜のそれも早朝の始発だ。当然、2人とも席に座れた。

楓は弁当をとなりの座席に置き、子供のように後ろを向いて外の景色を夢中になって見ている。そんな無邪気な楓を真珠はあまり恥ずかしく思わなくなってきた。というより楓と自分とでいる2人の空間があの頃の・・・子供の頃に帰ったような気分で真珠は妙にリラックスしていた。

その時、ポケットでマナーモードにしてある携帯が震えてすぐ止まった。メールだ。

松山コーチからだった。

〜おはよう　真珠！　無事起きたかな？　昨日の件。本当にそんな意味は無かったんだよ。
とにかく今日はがんばろう！　なんにしても悔いのない演技をしようね。じゃあ会場で待ってるから。〜

・・・・悔いのない演技・・・・

パタッ！！

真珠は携帯をおもいきりよく畳んだ。眉間にしわを寄せ、口を真一文字に結んだその表情は　あきらかに怒りがにじみでていた。

『”才能”を見せる・・・』

畳んだ携帯をさらに力強く握った。
車窓ごしの風景は次々に進んでいく。

『”予想を裏切る”ってことがこれで良いのかわからないけど・・・でも考えついた”答え”は一つしかない。』

真珠は携帯をポケットにしまいアゴを少し高くし目を細めて風景を見た。

『フィギュアスケートの要素で最も得点がもらえ”華”とも呼べる――ジャンプ。
”才能”見せるとすればこれしかない・・・・』

下唇を噛んだ。

『ジャンプコンビネーション。３Ｆ（トリプルフリップ）＋２Ｔ（ダブルトゥループ）の予定を３Ａ（トリプルアクセル）＋１Ｔ（シングルトゥループ）に変更する！』

ちなみに女子の公式大会で３Ａを決めているのは長いフィギュア史上でも３人しかいない。

『練習での成功率は２０％を切る・・・成功してもＧＯＥ（技のレベル評価で加減点される制度）で減点はかなりあると思う・・・』

真珠の目は外の景色よりももっと遠くを見つめていた。

『賭けだけど・・・”才能”見せなきゃ、優勝したって同じこと・・・二度と引退勧告なんてさせない！』

★

朝早いというのに会場はざわめいていた。沢山のクラブの生徒、コーチ。そして応援の親たちがそれぞれ塊になってざわめきを一層大きくしていた。

縦浜スケートクラブもその塊の一つだった。先輩の真珠の演技を見ようと小学生や下級生の生徒が私服で来ていた。

松山コーチが真珠たちに気づき手を振った。

「おはよう真珠　よく眠れた？」

真珠は気合の入ったような、にらみつけるような鋭い表情で松山コーチを見つめて挨拶を返した。

「はい。」

そんな真珠の緊迫感をモノともせず楓はまたおかしな行動をとりだした。真珠の背中に隠れているのだ。シリアスな空気を飛ばされちょっと真珠は気に障っていた。

「何やってるのよ　楓？！」

「しっ！　先生が居るかもしれないでしょ・・・」

真珠ので背中に隠れながら辺りの様子をじろじろとうかがっている。

「は？　何いってるの？　あんた衣装とか先生が持ってきてくれるんでしょ？」

「そうだけど・・・まだ怒ってるかもしれないし・・・」

こころなしか楓は少し震えているような気がする。楓がここまで怖がるなんて・・・どんなコーチなんだろう・・・と真珠は思った。その時、２人の視覚の外で足早に近づく足音。

「先生　怒ると怖いんだから・・・こういう時は極刑の・・・・」

そういうと楓は目をつぶって首をふり、恐怖をふりはらった。

「きょくけい？」

真珠が楓のほうに振り返ると同時に、ガボッと楓の頭をわしづかみにする人がいた。

「よく、わかってるじゃない。・・・か・え・で・ちゃん☆」

その人は耳で息を感じるほど口元を楓の耳に近づけて喋った。
震えながら楓はゆっくりと振り返る。
「極刑！！　くすぐりの刑　三分間じゃー！！！！　このスカタンがー！！！！」
そう叫ぶとその人は楓の両脇をくすぐり始めた。楓は逃げようとしても器用に追われ逃げられない。
「ひゃはははははは・・・・・ははっは」
楓は笑いすぎで息が出来ないらしい。
『くすぐりの刑って・・・さすが楓の先生・・・幼稚な・・・』
真珠は引きつって笑った。楓はさすがに苦しくなってきたのかタップしはじめた。
「や、やめて・・死んじゃう！！　あ・・・・蒼井先生――――！！」
その言葉に真珠は半笑いを辞め、いたずらっぽく楓をくすぐってる人を良くみた。
その人は真珠も良くしっている人だった・・・
髪を下ろした姿は初めて見た。

映像で見るその人はいつもキレイに髪を束ねていたから・・・

私服姿も初めてだった。いつもは美しいコスチュームで氷上を滑っていたから・・・

「あ・・・蒼井　桜・・・・」

楓のコーチは真珠のフィギュアスケートの原点であり目標の蒼井桜だった。

第二話（後書き）

「コブタの真珠」第二話を読んで頂き本当にありがとうございます。
この物語は全１１話です。
続きを読みに来ていただけるのをお待ちしております！！

かよきき

第三話

『蒼井・・・桜！！』

真珠は楓をくすぐっているコーチを見て、震えた。
この人の演技をビデオで何回見ただろう。
何回真似をしてみて・・・自分が滑っているとき蒼井桜ならどう滑ったかなんて
何回考えたろう・・・

『あのノクターンの・・・　私の目標の人が・・・楓のコーチ！！
』

真珠は驚きのあまり目を見開いたまま動けなかった。

楓はくすぐられ過ぎでゼーゼー言ってヨダレをたらして白目をむいている。

「懲りたか！　サル娘！　」

蒼井は楓の耳元で大きな声でしかった。

『ちょっとイメージがちがうけど・・・』

もっと女らしい人だと思ったら以外に男っぽいので真珠はまたビックリした。

しかし、楓はどんなにくすぐられていても四段重ねの弁当だけは手放さなかった。

「ん？　それは・・？」

「これは、親友のコブタちゃんのお母さんが作ってくれたお弁当です・・・へへへ」

「弁当？」

にっこりと真珠に笑顔を向けた。

「そして、彼女がコブタちゃんです・・・親友です☆　マブです☆　ソウルメイトです☆」

そういうと楓はすこし赤くなった。

「バカ！　コブタじゃないでしょ！　鈴原です！　鈴原真珠です！」

慌てて真珠は蒼井に自己紹介をした。

蒼井はやさしく真珠の手をとり、さっきとは別人のようににっこりと微笑んだ。

「このサルが色々迷惑かけたね・・ありがとう・・お弁当まで・・・」

「い・・・いえ・・・そんな・・・」

真珠は感激して顔が真っ赤になり鼓動が早くなった。うまく喋れない・・・

蒼井は真珠の手を話すと楓の荷物と弁当をもぎ取った。

「おら！　行くよ！！　」
「あ！　先生　お弁当は私が・・・」
楓と蒼井は弁当を引っ張り合いながら更衣室の方に向かった。
真珠は蒼井に握られた手を大事そうにもう一方の手で包み顔に近づけ、ぼーっと2人の行った方向を見続けていた。

「ちょっとアッチ系ね・・・この子・・」
松山コーチ達は真珠と話している人物があの元オリンピック選手の蒼井桜だとは気づいていない。ただキレイな女の人と話している真珠を見て引率に来ていた相沢コーチにひそひそと冗談まじりで噂していた。
しかし真珠の目は至って正気の目だった。

『蒼井さんは現役時代・・・どの要素もレベル4を獲得した完璧なスケーターだった。』
合わせられた手に力が入る。
『だとすれば・・・楓も・・・相当なレベルに鍛え上げてるに違いない・・・』
真珠は今まで無い危機感を感じた。
バッグに手をかけ、考え込んだ。
「あの・・・松山先生・・・」
松山コーチは相沢コーチとの話を辞め振向いた。

「一人で集中したいので・・・ギリギリまで外にいたいんですけど・・・」
「・・・・・・・」
松山コーチはしばしだまったが、すぐに返答した。
「わかったわ　出番までには戻りなさいよ」
「ありがとうございます・・・」
そう言うとそのまま真珠はリンクの建物の裏の方に向かっていった。
「へー珍しいね・・・いつもならデータデータで必ず人の練習も演技も見てるのに・・・」
相沢は幼い生徒の手をつなぎながら、遠ざかる真珠の方に目をやった。
松山コーチはその言葉に何も返せずじっと真珠の背中を見ていた。

★

その会場はすこし広めの公園と隣接していてリンクの建物の裏に少し広めのスペースがありキレイにタイルが敷き詰められ、いちょう並木で公園と区切られていた。
『よし、ここなら人目も少ない。』
真珠は持ってきたバッグのチャックを開けた。中からフィギュアスケート靴ではなくインラインスケートでやはりつま先にトゥピック

の代わりにゴムのストッパーのようなモノが付いている。
そのスケート靴を真珠はつけはじめた。

『出番まであと3時間くらい・・・』

紐を何重にも縛るので時間がかかる。

『3Ａ（トリプルアクセル）の成功率を少しでもあげなければ・・・』

片足を履き終わり、もう片一方の足にスケート靴を通した。
空はマバラな雲が早く流れ、時間が刻々と流れていることを感じる

★

「おっ始まったね」

大会が始まり選手をアナウンスする音が更衣室まで聞こえる。
蒼井は楓の髪をセットしていた。楓はもう衣装に着替えている。
その更衣室では他の選手たちもそれぞれに準備を進めていて活気でざわめいていた。大きな鏡の前に化粧道具などを置く台があり、個人個人の道具が置いてある。

「せ・・先生・・・それはなんですか・・・？」

楓の前の化粧箱の横に置いてあるのはどう見ても缶ビールだった。

「ビールだねぇ。　私がフィギュア見ながら酒飲むの好きなの知ってるでしょ？」
「ビール？」

楓はがばっと真珠の母に作ってもらった弁当を抱え込んだ。

「このお弁当は楓のだからね！！　」

「あーわかってる。　わかってる。」

ニマっと笑う蒼井

「とっとくわよぉ　いやぁねぇ　ホホホ」

その表情を見た楓は不安で顔が引きつり鼻水が出ている。

★

ブロック予選はすでに始まっていた。１８歳までの出場資格なので真珠よりかなり大きい子も出ている。リンクの回りは審判団の場所以外はコーチや関係者がたくさんいてテレビカメラも陣取って取っている。

松山コーチも同僚のコーチと共にリンク際で他の選手の演技を見ていた。

「ちょっとゴメン！」

控え室の方から人をかきわけ蒼井桜が、ガシガシやってきた。

「この辺ででっかい弁当箱持った女の子みなかった？　　」

「い・いえ・・・」

「くそぉ～　あのサル娘！！　」

よく見ると元オリンピック選手の蒼井桜と気づき松山は少し緊張した。真珠がさっき緊張して話していたのを思い出し納得した。

楓は真珠に作ってもらった四段重ねの弁当を持って消えたのだ。

その時、今演技していた子の得点が発表された。

掲示板に「３８．２４」という数字が出る会場からすくなからず拍手が怒る。

「おー　凄い！！　また真珠の予想的中じゃん！！」

松山コーチと一緒に見ていた相沢コーチが真珠の予想表を見て感動している。

その場を去ろうとした蒼井が”まじゅ”と聞いて足を止める。さっき楓に紹介してもらった”コブタ”だと思い出したからだ。

「すごいね・・・本当にあの子。努力家で・・・研究家で・・・」

相沢コーチは松山コーチの目から涙がこぼれていることに気づいた。

「松山・・・？」

「言えないよ・・・」

涙が頬を伝い落ちる

「”才能ないから辞めろ”なんて・・・あの子に言えないよ・・・」

蒼井は松山コーチに背を向けながら言葉を聴いていた。
次の選手がリンクに入っていく。
着々と大会は進んでいた。

★

リンク裏と公園の狭間の場所でインラインスケートを使い真珠は練習を繰り返していた。
何回も何回も３Ａ（トリプルアクセル）に挑戦していた。

楓を探していた蒼井が通りかかり、建物の影にとっさに身を隠した。
慣れないインラインスケートのため何度か転んだのか、ヒザには擦りむいた跡がある。
ポニーテールは乱れ、背中がシャツから汗で透けている。
着地のたびにバランスに苦しむ真珠。両膝に手をかけ息を整える。

『才能さえ・・・』

再び滑り出す。蒼井は手を組んで見つめている
勢いをつけた後、小ブレーキをかけ一気に跳び回転する。

『才能さえ見せられれば！　』

だが二回転半ちょっとすると降りてしまう。
はぁはぁと肩で息をする真珠。

『だめだ・・・どうしても回転が不足する・・・勢いは十分につけているはずなのに・・・』

顔の汗を手でぬぐう

『何？　何が足りないの？　』

途方に暮れていると、後ろからカツカツと足音が近づいてくる。
振り向くと、それは蒼井だった。アゴに手をやり、じーっと真珠を見ている。

「あなた・・・なかなか良い体してるわね・・・」

そう言うと突然、真珠の体を触り出す蒼井。

「な、何？！　・・・・あ・・・・ぁ・・・」

真珠は憧れの蒼井にいきなり何をされてるのかわからず、大人しくされるがままだった。

腕から胸、太ももからおしり・・・あらゆるところを触られる真珠。
『この世界・・・”あっち”系の人も多いって聞いたことあるけど・・・、まさか蒼井さんが・・・』
普通なら引っ叩いて逃げるところなのだが、相手は憧れの蒼井桜。
真珠はまんざらでもなかった。
「あ・・・あん・・」
慣れないあえぎ声を出してみる。
突然の桃色声に蒼井は青ざめる。
「へ・・変な声だすな！　ガキのくせに・・・」
慌てて手を引っ込める。
「え　終わり？」
なんだか期待はずれの顔。
「あんた・・・足　太いわね」
「！！　何をいきなり・・・」
突然の言葉に意味がわからない
「３Ａ跳び（トリプルアクセル）たいんだろ？　」
「！！！　」
蒼井は腰に手をやり一方の手で頭をかいた。

「軸がぶれてるのよ」
「！　」
真珠は背を向ける蒼井を凝視した。
「多回転ジャンプは着地をする右足を軸に回転する。その時、空中で両手両足を回転軸に引き寄せ締めることで軸自体が細くなり内側に向け力がつき円心力が上がり回転の力が増す。あなたの場合、円心力を得る時　両手両足がその太い太もものせいで締め切れず短時間で必要な回転する力が得られない。」
真珠は茫然とした。
「や・・・痩せろってことですか・・・？　これ以上・・・」
真珠はすでに限界まで食べない事にしている。これ以上のダイエットは不可能だ。
「それはあなたの自由。　あなたは基本は完璧だよ。さし当たってあんたに大事な事は・・・・」
蒼井は振り返り　真珠の目を見る。
「いかに右足を中心に軸を作るか、そして少しでも”回転力”を得る時間を作れるか
つまり・・・いかに高く跳べるか・・・・だけど・・・・」
じっと真珠の瞳を見つめる蒼井。真珠も蒼井の瞳を見た。何かが通じ合う。

一瞬、風が吹いた。
真珠の瞳の光がさっきとどこか違う。

「右足・・・高く跳ぶ・・・」

ぶつぶつと呟きながら、再び真珠はゆっくりとスケートを滑らせた。
そして段々とスピードを上げ、ジャンプを跳ぶ瞬間だった。

その勢いを全て左足つま先に貯めた。一瞬タイミングが狂えばきっとすっぽ抜けてスライディングしてしまうだろう・・・だがこの時の真珠はまるで魔法がかかったように完璧のタイミングだった。
そして次の瞬間、その”力”を回転しながら一気に上方にジャンプした！
今までよりも思い切り腕も股関節も締め、そして右足を軸にする事を意識した

一回転・・・
二回転・・・・
三回転・・・・・・半！！

その”回転”の強さに着地の反動も相当強かった。右ヒザをクッションにして曲げ転倒を逃れた。
真珠は３Ａ（トリプルアクセル）を成功した。
一番、驚いたのは本人だった。

『跳べた・・・？・・・・・・・跳べた！！！』

全身に血がみなぎっているように熱い。頬があかくなった。
思い切り拳を握り、興奮を抑えようとしたが、自然と笑みがこぼれ

た。
真珠は心の中が一瞬にして照らされた。
だが・・・それを見ている蒼井の顔に笑顔はな

第三話（後書き）

「コブタの真珠」第三話を読んで頂きありがとうございます。
この物語は全１１話です。良ければまた読みに来てくださいね！！

第四話

『出来る！・・・出来るっ！！！　』

真珠は何度も３Ａ（トリプルアクセル）を繰り返した。
高いジャンプを要するエネルギーを蓄えるため仮定トゥピックの部分に一気に一瞬に負荷をかける。その時のタイミングが一番難しいのだが、今の真珠はまるで魔法がかかったように成功を繰り返した。
うれしくてたまらず笑みがこぼれる。

しかし、蒼井の表情は難しく眉をひそめている。
真珠はそのまま蒼井の前にやってくる。

「あの・・・ありがとうございます！！　」

真珠は丁寧にお辞儀をした。

「いや、こちらこそ、楓がお世話になったから・・・」
「そんな・・・」

真珠は腕時計を見た。もう準備をしないと間に合わない・・・
もう一度深くお辞儀をするとくるりと踵を返しバッグの置いた方に向かった。

「でも・・・今の・・・」

蒼井は手で口を隠し何か言いよどんだ。

「はい？」

振り返った真珠には、まだ微笑みがこぼれている。

「いや・・・いいんだ・・・」

何か言いかけたはずの蒼井は言葉を飲み込み下を向いた。

「じゃね・・・」

蒼井はその場を去ろうと真珠に背を向けた。

「あ・・あの・・・」

蒼井は足を止め、耳だけを真珠に向けた。

「もし、頼んだら・・・・私もコーチしてもらえるんですか？」

真珠はまるで好きな男の子に告白しているかのように顔を真っ赤にしていた。

「悪いね・・・」

即答だった。だが真珠にとって蒼井は雲の上のような人だった・・・断られる覚悟はあった。まして・・・自分のような要領の悪い選手はなおさらだろう・・・

そう思ったとき、蒼井は振り返った。

「いや、あなたがどうとかじゃなくて・・・」

軽く鼻でため息をつく蒼井。

「迷ってるんだ・・・私も・・・このままこの世界にいるか・・・」

蒼井はどこも見ていない視線を地面に向けていた。

真珠には蒼井の言葉に重みを感じ、今の歳の自分ではそれ以上何も聞くことはできなかった。

その時、真珠のバッグの中で携帯が鳴る。アラームだった。

「あれ・・・もうすぐ楓の出番なんじゃないんですか？」

「！！！」

蒼井は一気に青ざめる。

「楓・・・見なかった・・・よね？」

「い・・いないんですか？！」

★

蒼井と真珠は2人がかりで楓を探した。トイレ、階段、控え室、木の上、植木の間・・・

あらゆる所を探しまわった。

真珠を控え室をもう一度よく見るとロッカーの上に真珠の母親に作ってもらった四段重ね弁当の空き箱を見つける。

「いた？！」

蒼井が控え室に入ってきた。

「いえ、でもロッカーの上に弁当箱が・・・」

「あのサル娘！！　人のつまみをー！！　」

「蒼井さん、もしかして・・・弁当を探してたんですか？」

真珠が呆れていると、遠くからアナウンスが聞こえる

〜エントリーナンバー　１５　中山　楓さん　〜

「！　」

真珠と蒼井はリンクの方に急いで向かった。薄暗い廊下を抜けるをまぶしいカクテル光線が目に入る。

しかし・・・ひと目見て異常に気づく。　あまりにもお腹が膨れている。真珠はあきれて呟いた。

「ちゃんと・・・出てるけど・・・お腹も出てる・・・」

「弁当返せー！！　」

蒼井は楓にどなった。

だが楓には全然聞こえないようだ

。

「ちっ！　極刑決定！！」

リンクの壁を蹴る蒼井。

しかし、そんな蒼井をよそに真珠は深刻な顔で楓を凝視していた。

『さっきので、よくわかった。蒼井桜はやっぱり天才だ・・・こんな人に教えられている楓・・・昨日見た３Ｆ＋３Ｔ（トリプルフリップ＋ダブルトウループ）といい・・・いったいどれ程の演技を見せてくれるの？　楓！！』

リンク、会場いっぱいに曲が流れはじめた。

★

その大きく膨らんだお腹で楓は滑り出した・・・・そして最初のジャンプに入ると思った時だった。

「うぷっ！」

口を押さえた楓は急いでコーチボックスのほうに向かった。

「おえええぇぇぇぇ・・・・・」

その声が会場中に響き渡る。　音楽が止まった・・・

一瞬の静寂が来た後、会場はドォっと笑い声に包まれる。

「た・・・食べ過ぎた・・・」

倒れた楓は、ぷるぷるしながら呟いた。

大会関係者の人なのか腕章をつけたスタッフが楓を介抱した。

「すみません、中山　楓選手の関係者・・・コーチはいませんかー！」

蒼井と真珠のすぐ横で楓のコーチを探すスタッフ。一瞬、蒼井と目が会う。

「知りません。　そんな子知りません！　　他人です。」

小刻みに手を振る蒼井に唖然とする真珠。

「ぜんぜぇ～」

楓が蒼井の方に震える手を伸ばす。

「シャ――――――！！！　」

楓の手を避け猫のように威嚇した。

そんなやりとりを、茫然と見ていた真珠の後ろから松山コーチが声をかけた。

「真珠　探したわ・・・そろそろ用意しないと本当に間に合わないよ」

「あ　はい！　」

コーチと共に控え室の方に向かい薄暗い廊下に入った。

スタッフがあわてて

モップとバケツを持ちリンクの方に走っていくスタッフとすれ違う。

真珠は逆方向に歩きながら、そのスタッフを見送った。

『・・・ラッキーかもしれない・・・』

未知で蒼井桜に教えを享受してきた楓を、真珠は一番恐れていた。

ショートプログラムを棄権したことで楓に優勝の目はない。

真珠はコスチュームに着替えながら少しほっとした。

「でも・・・」

スケート靴をいつもどおり念入り縛り終わるとゆっくりと顔を上げたその強い瞳は覚悟と決意と挑戦と・・・様々なプレッシャーが入り混じっていだ。

★

曲もクライマックスを過ぎた、まもなく前の選手も演技を終えそうだ。

真珠は一番最後から3番目の滑走だ。

コーチボックスで松山コーチと待機、準備運動をし続ける。

「先生、他の選手の結果はどうでした？　」

壁に片足を高く上げ更に上半身を上げた片足に近づける。一般の人から見たら考えられないほど柔軟な体だ。

「ほぼ、真珠の予想通りよ」

松山コーチは真珠にもらった予想の紙をポケットから出した。実際の結果を予想の横に赤ペンで書いてある。

「よし・・・」

真珠は小さく拳を握った。

〈エントリーナンバー36・・・鈴原真珠さん〉

アナウンスが場内に流れる。真珠はブレードカバーを取り松山に渡

した。

「真珠、しっかりね」

「先生・・・」

真珠は松山の目を見た。

「見ててください」

真珠はゆっくりとリンクに入った。

『見ててください。　私の”才能”を・・・！　』

静寂が会場を支配する。

松山はコーチボックスで祈るように手を合わせた。

蒼井はその後ろで手を組んだまま壁に寄りかかり見ている。

観客、審査員、みんなが真珠に集中している。

★

真珠のはじまりのポーズをとる。左足に重心をおき、右手は腰にかけ、左手を横に伸ばし

その手を下に向けていた。

チャイコフスキー　”くるみ割り人形”の中から「花のワルツ」

曲が流れはじめる。

下に向けていた左手を花が咲いたように上にかざし、後方に滑り出す。

最初のジャンプは２Ａ（ダブルアクセル）。　真珠はステップと共に前向きに滑りだす
そして、左足トゥピックでブレーキをかけるように跳んだ！
１回転・・・２回転・・・半。　着地もキレイに決まる。

『２Ａ（ダブルアクセル）　＋３．５』

続いては３Ｆ（トリプルフリップ）左足インラインに乗ったまま右足トゥピックで踏みきる・・
※（スケート靴はのブレードは刃が二本点いており、あまりまっすぐには滑らず常にカーブを描く、その時カーブの内側をイン外側をアウトといい、ジャンプはそれぞれ右足、左足、イン、アウトなど、細かい段取りを踏まないとジャンプと認められない。）

１回転、２回転、３回転・・これもキレイに右足着氷。

『３Ｆ（トリプルフリップ）　＋５．５』

真珠はいつものように頭の中をまるで計算機のように点数を加算していく。
次々と演技を成功させていく

「よし、いつもどおり良い滑り出し・・・」

見ている松山コーチは着ているコートの脇バラの辺りを無意識に力いっぱい掴んでいる。

曲の流れにピッタリ合っている。　一瞬、跳び右足を前に出し片足でスピンを回る。

『ＦＳＳｐ（フライングシットスピン）　＋２．３』

スピンを終えると後ろ向きで滑り、スピードを出す。
そして前向きになる。
曲はクライマックスを終えようとしている。

『　ココ！！！　』

風を切るなか真珠は目を見開き、体全体の神経を意識した。
指先、足先、髪の毛、頬に触れる風の流れ、ブレードの先の氷の感触まで感じるように。
その高めた集中力を左足にかけた。

そして、増したスピードと体重のエネルギーを左足トゥピックに集約する！
観客からは一瞬、ブレーキをかけたように見える。
そしてその反動を今度は左足ヒザで受け止め、一気に跳んだ！！
　１回転・・・
２回転・・・・・・・
３回転・・・・・・・・・・・・・・・半！！！

ジャッ！！着地！！
高く跳びさらに高速で回転した勢いを右足、右ひざで受けた。そうとうな負荷だったがかろうじてバランスを保つ真珠

『よし・・・・・・！！　』

真珠は自然と顔がほころんだ。
３Ａ（トリプルアクセル）を成功させたのだ！

予定外の演技に松山コーチは驚いた。
真珠はすぐさま、着地した右足で１トゥループを跳んだ。
３Ａ＋１Ｔのコンビネーション・・・

『よし！　計算通り！！　』

真珠の顔は微笑みから完全なる笑みに変わる。締めくくりのステップシークエンスをはじめた。

だが、松山コーチは笑っていなかった。それどころか眉間にしわを寄せ
明らかに怒っている表情で真珠を見ていた。

第四話（後書き）

「コブタの真珠」第４話を読んで頂きありがとうございます。
この物語は全１１話です。　是非また読みにきてください！！

第五話

ワ――――――――――――！！

「３Ａ＋１Ｔ（トリプルアクセルシングルトゥループ）に成功したぞ！！」

「すごい！　ジュニアの　ブロック予選で見られるなんて！！」

会場に歓声が出る。

シニアでも出来る人の少ない３Ａ（トリプルアクセル）を真珠が成功させたからだ！！

真珠は無事全ての演技を終え曲に合わせ、フィニッシュのポーズをとった。

パチパチパチパチ・・・・

関係者など、他のクラブのコーチから拍手まで起こった。

真珠は息を切らしながらも、晴れ晴れとした笑顔をしながら帰還する。

『やった・・・・・・・やった！！』

松山コーチの姿が近づく。

『見た？　先生・・・私の才能！！』

リンクの際につく松山がスケート靴のブレードカバーを渡した。

急いでカバーをつけ、息を整え満面の笑みで松山の顔を見た。

「に・・・」

松山が第一声を出す。真珠の瞳はキラキラと輝いていた。

「二度とあんな3Aやっちゃ(トリプルアクセル)だめ!!」

「!」

完全に予想外のコメントに凍りつく真珠。
理由が全くわからない。拍手も歓声も、あんなにもらって・・・なんといっても
トリプルアクセルをやったのだ。
松山は振り返り、キス&クライ(得点結果をコーチと待つ会場)の方に向かう。
会場はまだざわめき、やりにくそうに次の選手がウォーミングアップをしている。

『やっと跳べたのに・・・・』

真珠の拳は震えていた。

『なんで認めてくれないの?!』

やっと一歩を踏み出す。

体が重い。まるで空気のゼリーの中を歩いているようだ。
悲しさより怒りの方が先立って沸き立ってくる。
理不尽としか考えようがない。努力も認めず、才能を見せても認めない。
まるで、自分だから、鈴原真珠だから、認めてくれないのではないのかという考えがよぎる。

キス＆クライには椅子が2脚用意され、正面に電光掲示板が見える場所だ。
松山はすでにその左側の椅子に座っていた。
真珠は大きなため息をつきながら、もう一脚の椅子に座った。

小さい頃からずっとこの松山コーチの元でスケートをしてきた。毎朝の練習もかかさず見てきてくれた。自分の事を嫌いなわけが、理不尽に自分を傷つけたりするわけがない。

・・・・それにしても・・・・

真珠は必死に松山の言葉の意味を良い様に理解しようとした。だが、どうしてもいじめられているような感覚で、松山へのふつふつとした怒りが沸いてくるばかりだった。

｛ただいまの演技の結果・・・・鈴原真珠・・・・｝

電光掲示板に得点が出る。
技術点　２０．４８
構成点　１９，７３
合計　４０．２１

歓声がざわめきに変わる・・・

「そんな！」

思わず声を出した。

真珠は茫然とその掲示板を何度も見直した。

「”巻き足”だよ・・・」

後ろから声が聞こえる。　蒼井だ。

「”巻き足”・・・私が？」

蒼井は腕を組み壁に寄りかかっていた。

「無意識だろうけど、右足を軸にするためにアンタの左足は極端に曲がり、美観がかなり損なわれたアクセルになってしまった。おそらくＧＯＥ（要素のできばえ）、ファイブコンポーネンツ（構成点）共にマイナスになっている。着地もぐらつきが見られ　あれでは、ただ跳んだだけ、認定はされても得点には結びつかない。　もっといえばこの”巻き足”に関しては外国の審判はもっと厳しくマイナス点にするものもいる。」

真珠は立ち上がり蒼井の方に向かった。松山コーチはなぜ蒼井と真珠がそんな会話のやりとりをするのかが理解出来なかったが一応、真珠と共にキス&クライから出る。

「なんで、さっき言ってくれなかったんですか・・・」

「すまん、言いそびれた。それに・・・言っていれば軸の意識が薄れジャンプそのものが失敗に終わっていただろう・・」

松山はやっと事の成り行きが見えた。

「まさか・・あなたが、あのアクセルを・・・」

松山の問いに蒼井は一瞬、目を合わせたがやはり視線を外して答えた。

「ああ、この子が跳びたがっていたからね・・・」

松山は歯を食いしばり思い切り蒼井をにらみつけた。

「この子の成長過程も知らないのに、勝手なことをしないでください！！　それも大会中に演技内容を変えさせるようなことを・・・・！！！」

真珠は松山がこれほど怒っているところを見た事がなかった。驚いて何も言えない。

だが蒼井はその言葉に逆ギレしたように目を細め眉をひそめた。

「気にいらないね・・・」

松山は怒りの表情のまま蒼井をにらんでいる。

「何を悠長なことを言ってるんだ・・・・コーチなら、この子に時間がないことくらい解っているはずだろ・・・・」

蒼井は松山にガンをとばし返し静かに言い放つ。
その言葉に松山は急に顔色を変えた。
「え？　何？　何の話ですか・・・私、別に病気とか怪我とかありませんよ？　」
蒼井は一瞬、真珠を見てすぐに視線を松山に戻した。
「やっぱり何も言ってないのか・・・」
「蒼井さん！　」
松山が蒼井を制止する。
「だから、いったい・・・・」
蒼井は真珠を見つめて言った
「あんたは　もうすぐジャンプが跳べなくなるんだ。」
次の選手の演技は始まり、きれいな音楽がかかっている。
だが真珠には蒼井のその言葉以外なにも聞こえず、マネキンのように立ち尽くしているだけだった。
「蒼井さん！！！！！！　」
松山が大きな声を出した。　一瞬関係者が、みんな真珠たちを見る。

蒼井は松山を無視し話し続けた。
「女としての発育が早すぎるんだよ。　１４才のフィギュア選手にいては胸もお尻もかなり大きい・・・大きすぎる・・・」
真珠はやはり凍りついたように動かず聞き続ける。
松山は両目を閉じ眉間にしわを寄せうつむき唇をかみしめ、そして両の拳をにぎりしめた。

「おそらく近いうちに体重も一気に増加する。それでも身長が伸びればバランスが良くなることもあるが・・・たぶん身長もそれほど伸びないだろう・・・大抵の子は身長の方が先に伸びるから・・・」
真珠はまるで顔はゴムになったのではないかと思うほど固くなった重い口を開いた。
声はかすれている。

「それで・・なんで跳べなくなるんですか・・・」

蒼井はその痛々しい心痛を察しながらもその問いに答える。

「重心が変わってしまうんだ。　それがどういう事かわかるかい？
体の感覚そのものが変わってしまうのさ。さっきの練習をみて思ったよ。あんたは、頭もいいし勘も悪くないが体で覚えるタイプだ。そんな人間の体が短い期間で入れ替わればどうなると思う？
今まで覚えてきたことがまるで嘘のように出来なくなるんだよ。
当然、今出来ないことはこの先出来るわけがない・・・」

真珠の次に滑った選手の演技が終了した。まばらば拍手が会場から出ていた。
だが、いま三人にはまったく別の世界にいるようにその拍手は聞こえない。

「女子選手には必ずやってくる壁だ。あんたはそれが普通より早い。」

松山はあきらめたように肩の力を抜いた。だが顔はうつむいたままだ。

「それがフィギュアスケートさ。　華やかな”氷上の美”の舞台の裏側・・・」

蒼井の表情は冷たく感情を消していた。

「才能の淘汰。」

そう言うと、蒼井はだまった。どれほどキツク、痛い言葉なのか、よくわかっていた。

だがこの鈴原真珠という選手はとてつもなく粘り強くそして努力家であることは、ひと目見てわかっていた。だからこそ・・・その”才能”を他で発揮すれば・・・そういう気持ちだった。そしてそれを言わなかったこの松山というコーチを恨んだ。

三人の間にしばし沈黙が流れる。だがその沈黙をやぶったのは真珠だった。

「ふ・・」

蒼井と松山は同時に真珠を見た。

「ふふふ・・・」

真珠の肩は笑いで大きく揺れていた

「なるほどね。　やっと謎がとけた・・・」

笑顔。

「なんだ、それで昔から引退ばっかり勧めてたんですね・・もう先生も早く言ってくれればいいのに・・・」

真珠は寒そうに自分の肩を抱いた。

「あの・・じゃ・・私寒いから先に控え室行ってますね。　そっかー　ふーん」

真珠はそのまま控え室の方へ向かう薄暗い廊下へ向かった。

松山は動かない。

バンッ！

蒼井は近くの壁を思い切り平手で叩いた。

「だから嫌なんだよ・・・コーチなんて・・・」

真珠の次に演技した選手の得点が掲示板に出る。

その得点はやはり、真珠の予想とほぼ同じ点数だった。

★

控え室には弁当を食べすぎで演技中に吐いてしまいグッタリした楓がベンチで横になっていて、それ以外に人はいなかった。まだ気持ちが悪くてお腹に意識がいっている。
そんな風に楓がボーっとしていると控え室のドアを開けて誰かが入ってきた。楓がゴロっとドアに具合の悪そうな顔を向けると、それは真珠だった。

「あ・・・コブタちゃん・・・」

楓は起き上がろうとせずそのまま喋った。

「ゴメン・・・気持ち悪くて、コブタちゃんの演技見られなかった・・上手く滑れ・・・」

楓は言葉を止めた。

水滴が落ちるのを見たからだ。

真珠は泣いていた。

慌てて楓は起き上がった。

「コブタちゃん・・・？」

なぜ泣いているのか・・・楓には全然わからない・・・

「どうしたの？　失敗しちゃったの？　」

楓の問いには答えず真珠は涙を拭いながら、自分のロッカーの方に向かった。

「あの・・・えっと・・・」

楓は、あまり使わない脳をフル回転させて考えた。

「あっ　わかった☆　お腹が減ってるんだ！　そうでしょ！」

楓はさっと自分のバッグから何かが入ったビニール袋をとりだし真珠に差し出した。

「お弁当、すっごく美味しかったよ！　これ、コブタちゃんの分・・・ちゃんと残しといたんだよ　えへへ・・」

ニッコリと楓が笑ってみせた。

だが、真珠はそれを奪うように取り床に投げつけるのか、振りかぶった！

・・・だが、途中で止め、楓の手に突っ返した。

「蒼井さんにあげて・・・」

「え・・・う・うん・・・」

真珠は急いでロッカーからバッグを出し肩に担いだ。

「先に帰るから・・・」

真珠は楓を横切りカツカツとスケート靴のままドアに向かう。

「ちょ・・・ちょっと　コブタちゃん・・・着替えは？　」

真珠はかまわず、ドアを開け出て行く。
楓は真珠の後をドアまで追った。
だが真珠は走るような速さで出口の方に向かっていった。
楓は控え室のドアの前で立ち尽くした。

「うっきゃっきゅきゃきゅーきゃ？　（※サル語　”何があったの？）」

真珠を心配するあまり、ついサル語で呟いてしまう楓だった。

第五話（後書き）

「コブタの真珠」第五話をお読みいただきありがとうございます。
この物語は全１１話で完結します。
是非また読みに来てくださいね！！

第六話

ショートプログラムが全ての選手が終了し観客達が順番に帰っていく。
明日のフリープログラムに向け、ほとんどの選手達は早々に帰った後だ。最終グループの者達は自分の順位が気になり最後まで他の選手の演技を見ていたようでリンクから更衣室までの廊下を足早に戻っていった。

その一群がゆっくりと歩いていた蒼井を追い抜いていく。
中には元オリンピック銀メダリストの蒼井に気づく者もいたが、その不機嫌な顔を見ると誰も声をかけられずに、更衣室に入っていった。

「関係のない子にあんな事を・・・私の出る幕じゃなかったのに・・・」

蒼井は握った拳でまた壁を叩いた。その痛みでまた腹がたつ。
猛烈な後悔が蒼井を襲っていた。
”ジャンプが跳べなくなる”　”才能の淘汰”
真珠のためを思ってのことだった。だが事実を知れば何かが変わるという話ではない。
松山に怒鳴られたことで、熱くなっただけなのは自分がよくわかっていた。
まして、その前に松山を見かけた時、彼女は泣いていた。二人の間に深い絆のある証拠だったのだ。　それを・・・・

★

更衣室に入ると、まだ着替えの終わっていない選手がいた。一斉に蒼井に注目する。
楓は着替えどころか、ベンチに座り口をとんがらせて珍しく落ち込んでいた。
蒼井は楓の背後に回ると、いきなり頭をはたいた。

「まだ着替えてないのか・・・あんまり手間かけさすなよ・・・」
「先生・・・」

楓が振り返ると蒼井は更衣室を見渡していた。

「コブタは？」
「先、帰ったよ。　これ先生にって・・・」

真珠のためにとっておいた弁当の残りがビニールに入っている。楓はそれを蒼井に差し出すと、蒼井は目を細めてそのビニールを見つめた。
おむすび一個と玉子焼、唐揚が二個がグチャグチャになっていた。

「・・・・・」

蒼井はそのビニールを大事に受け取った。

「お前、コブタん家、知ってるよな？」
「ウキ？（※サル語　『はい？』」

★

「いらっしゃいませー」

土曜のファミレス、夜七時すぎ。店内は家族連れや学生などで混雑していた。
窓側の四人がけのテーブルに一人で真珠は座っていた。さすがに着替えは済んでいた。
過ぎ行く車をボーっと眺めている。

「お待たせしましたー」

ウエイトレスが運んできたのは特大のショートケーキだった。
今月は秋のスウィーツフェアでショートケーキ、モンブラン、ミルフィーユなどの特大サイズが５００円でコーヒー付きなのだ。
何を隠そうショートケーキは大好物。
真珠は生唾を飲み込んだ。

「いつぶりだろう・・・ケーキ」

食器ケースからフォークを取り出し先っぽの生クリームをたっぷりとすくった。

『今まで太るのを気にして一個まるごと食べたことなんて何年もなかった』

口の中に入れる。
瞳が輝く。口の中に広がる甘みが何とも言えない幸せをかもしだす。

『でも、もうそれも終わり・・・』

一気に飲み込むのはもったいない・・真珠はその一口目をまだ味わ

っている。

『フィギュア辞めちゃえば・・・全部終わり』

おかわり自由のホットコーヒーがゆったりと湯気を出している。

『朝早く起きる事も・・・友達の遊びの誘いを断る事も・・・全部から開放されるんだ』

真珠は二口目を刺した。今度はスポンジケーキを通り皿の底までフォークがついた。

”もうすぐ、あんたはジャンプが跳べなくなるんだ”

蒼井の言葉を思い出す。

「・・・・・・」

真珠の手はその二口目を刺したまま、止まっている。

「もうすぐ・・・」

『”もうすぐ”って　いつだろう・・・？』

真珠は今日の自分の演技を思い出した。

『曲りなりにも私は今日、３Ａ（トリプルアクセル）を成功させた・・・

もしその”もうすぐ”の間にもう一つ3回転ジャンプが降りられるようになったら・・・』

ガタッ！　突然、立ち上がった真珠を数人の客が見た。

『いや・・難易度の低いトゥループなら、たぶんイケる・・・ということは
3回転ジャンプを二つ・・・7級の合格が圏内・・・・』

そのまま請求書と荷物を持っていそいそと真珠はレジに向かう。

『シニアの出場資格は15歳以上。　ということは、私の成長があと一年持てば・・・』

真珠は思い切りファミレスのドアを開いた。

『あの目標だった世界のトップの舞台もまだ可能性がある・・・・』

「ありがとうございましたー」

ウエイトレスがテーブルを片付けにくる。
そこにはフォークが刺さったままのショートケーキとまだ口をつけてない暖かいコーヒーが残されていた。

★

自宅にたどり着いた。　玄関には明かりがついている。
真珠は玄関を開けるのをためらった。
会場から松山コーチたちに何の挨拶もしないまま出てきてしまった。

コーチが心配して連絡をしているかもしれない・・・・もしかしたら怒られるかもしれない・・・・
そう思ったのだ。
一息、深呼吸してから勢いよくドアを開けた。

「ただいまー　」

玄関に見知らぬ靴と、朝、楓に貸した靴があった。
どういうことか解らぬまま靴をぬぎ廊下からリビングのドアをあけた。

♪チャン　チャン　チャカ　チャカ　♪
リビングでは父、正則と母と、そして蒼井桜が酒盛りをしていた。
蒼井はどれだけ飲んだのか、箸で茶碗を叩きながら笑っている。
正則もそれを見て大うけだ。母も顔を赤くしてつまみを運んでいた。
あこがれの選手、蒼井桜とは思えない

「な・・・何してんですか！　」

人が深刻に帰ってきてるのに大人は酒盛りだ、真珠はムショウに腹がたった。

「おお　真珠！　あの蒼井選手だぞ！　本物だぞ本物！！　」

正則はハイテンションで蒼井を指差した。
蒼井は酒で赤くなった顔を真珠に近づけた。あまりの酒臭さに真珠は鼻を手でおおった。

「どーも　はじべばして　蒼井ですぅ」
「いやぁ本物は美人だよねー。」

「あらやだん　もう　お父様ったらお上手・・・、どうぞ、どうぞ♪」

そういうと蒼井は父の隣で手酌した。
まったく成り行きが見えない真珠が立ち尽くしていると足元から声がした。

「コブタちゃん・・・おかえりなさい」
「・・？！　楓？　なにしてんの？　」

楓は布団でぐるぐる巻きにされ床に放置されていた。

「ぐ・・・ぐるぐる巻きの刑・・・先生が罰だって・・・」

きゅるるる・・・楓のお腹のあたりから空腹の音がなっている。

「先生ー　お・・お腹が空きました」
「あーはーん？　ゲロ娘が空腹？　」

蒼井は出されているマグロの刺身を一切れ端で掴み楓の口元まで持ってくるb。

「よし！　あーんしてみ・・あーん」

楓が雛のように大きく開け、刺身が口の中に入ったと思った瞬間、蒼井はさっと引っ込自分の口の中に刺身を入れた。

「おほほほほほ」
「ぜんぜぇぇ・・・・」

楓は子犬のような顔をして泣いた。
真珠はあきれはて言葉もなかった。　だがこんなバカ騒ぎに付き合ってられない。

「あの私、明日も早いので、お風呂入って先に寝ます。」
「あ、ついでにこのゲロ娘も連れてって・・・」
「メシ！　メシ！　メシ！」

真珠は仕方なく布団に包まれ楓をそのまま引きずった。

「あ、そんな・・・せめて、一口～・・・」

楓が引きずられた跡にヨダレの線が出来ていた。

バタン！　とリビングのドアが閉まる。
その瞬間、蒼井と真珠の両親は一斉にため息をついた。
蒼井は、ドスンと椅子に腰掛けた。

「すみません・・・一言誤りに来たのに・・・言いづらくて・・・」

蒼井はグラスに入ったビールを一口のんだ。

「いえ・・・そういう事はハッキリ言って頂いた方がありがたい。」

正則は目線をテーブルに向けピーナッツをいじりながら答えた。

「本当に・・・情操教育と思ってやらせただけだったんですよ・・・
本当に・・・」

ピーナッツが、パキッと音を立てて割れる。

「本当に・・・あの子はよく頑張った・・・」

正則の後ろで真珠の母が正則の肩にやさしく手をかけていた。
その手を正則は握った

「母さん、明日の仕事はなんとか休むよ。一緒に真珠を観に行こう。」

「ええ」

2人の納得した笑顔に覇気は無い。

「すみませんでした・・・」

蒼井は残っているビールを一気に飲み込んだ。

★

チッ　チッ　チッ　チッ・・・・

真っ暗な客室の時計は11時を過ぎていた。結局、蒼井も鈴原宅に泊めてもらっていた。
真珠の両親も酒が入ったせいか早めに就寝したようだ。

静かな夜の時間。
酒のせい寝つきが良かったはずの蒼井だったが、小さな音が気にな

って目が覚めた。

「カチャ　カチャ　カチャ　カチャ・・・・」

時計の音かと思っていたら聞こえてくるのは部屋の外からだ・・・
気になった蒼井はトイレに行くふりをして様子を観にいこうと決心し布団から出た。
真珠の母にブカブカのスウェットを借りて来ていたが、寝ているうちに下は脱げてしまって下半身は生足だ。

戸を開け音の方に向かう。　その音は二階から聞こえる・・・・
家族がどこに寝ているかは当然知らないが、おそらく二階は家族の寝室だ。
蒼井はためらったが、ゆっくりと階段を上がった。

★

二階にあがると、かすかに灯りが洩れている部屋がある。

「カチャ　カチャ　カチャ・・・」

蒼井は恐る恐るその部屋をのぞいた。
　そこには学習机のパソコンに向かって必死に何か作業している真珠がいた。
机の隣のベッドでは楓がぐっすりと眠っている。

ギィィィィ・・・　蒼井の不注意で少しドアが開き音が出た。
その音に真珠は気づき振り向いた。

「あ・・・起こしちゃいました？　」
「いや・・・」
見つかった蒼井は、覗き見していたせいか、申し訳なさそうな顔して部屋に入った。
「蒼井さん・・・」
真珠は使っているパソコンの画像を嬉しそうに見せた。
「あの元祖　３Ａ（トリプルアクセル）の伊藤みどりさんは身長が１４５ｃｍしかなかったのに、体重は４５キロもあったんですよ！　身長の割合からしたら、今の私よりも５キロも重かった・・・」

真珠は自分が成長し体重が増えたあと、同じような身長と体重の割合で成功した選手の記録を探していたのだ。
蒼井は遠目にパソコンの画像を見ながらため息をついた。いくら身長と体重の割合が未来を想定した真珠の体と同じ選手を探した所で、成長過程違う以上、やってくる壁の大きさ・・・つまり、体の重心が変わってしまうという度合いはかなり違うからだ。
それを真珠に駄目押しして言うことは簡単だ。しかし、蒼井はそれを今日、強烈に後悔したばかりだった。そして明日はまだフリーが残っている。
「それは・・・・」

適当にお茶をにごそうとパソコンから目をそらした。
薄暗い部屋の壁が目に入る。そこには何かメモが貼ってあった。

《スピン時の足の角度１６５度》
スピンでレベル４を獲得している選手の美しいスピンの写真が添えられ、赤ペンで角度が測られている。

その横にはジャンプの種類別の点数表がある。　そこにジャンプごとにチェックがしてある。おそらく真珠の出来るジャンプだろう。その上にはステップの点数表。その横にはＧＯＥの評価の基準がこと細かに書かれている。その横には・・・・
蒼井は薄暗い部屋の中を見渡した。

そこには、無数のメモと資料、写真と図。フィギュアスケートのあらゆる角度からの情報が、張られていたのだ。
そのオビタダシイ数に不気味ささえも感じる。
蒼井は一歩下がった。
・・・・・・たじろいだのだ。

（な・・・なんなの・・・この部屋・・・全部フィギュアスケートの資料・・・）

蒼井は改めてパソコンに向かう真珠の後ろ姿を見つめた。

「”まだ”・・・」

蒼井は一瞬、震えた。
後ろから一瞬口の形が見えた。
笑ってる・・・

「私・・・”まだ”イケますよ・・・」

蒼井は真珠のコーチ松山が真実を言わなかったわけが解るような気がした。

（なんて・・・しぶとい子なの・・・）

急に本当の寒気が襲ってくる。

そういえば蒼井は下着だけで、下半身になにもつけてなかった。

季節は秋、もう初冬といってもいい季節だった。

第六話（後書き）

「コブタの真珠」第六話を読んで頂きありがとうございます。
この物語は全１１話で完結します。
よっかたらまた読みにきてくださいね！

第七話

東日本フィギュアスケート大会　関東ブロック　二日目。
フリープログラムの予定日。
空は晴れわたり雲は大きい塊がゆっくりと流れている。
１０月も終わりだというのに妙に暖かい朝だ。
スケート場にはとなりの公園まで花壇が続いており、沢山のパンジーがゆるい風に揺れている。
会場は昨日に引き続き、選手とコーチ、クラブや応援にかけつけた家族、友人たちでザワザワとごった返している。

「おはようございます！！　」

真珠は会場に入り松山コーチら所属するクラブの面々を見つけるやいなや、ズンズンと近づきいきなり大きな挨拶をした。そしてそのまま、会場に入る。どこか鼻息が荒い感じだ。

「お、おはよう・・・」

松山は迫力ある真珠の気合で無意識に道をあけた。

「まだ、あきらめてないみたいだよ・・・金メダル級の負けず嫌いだね。あの子は」

真珠の来た方角から蒼井がまだ眠気から覚めない楓を脇に抱えながらやってくる。
楓は寝息まで立てている。昨日、鈴原宅に一晩止めてもらったので、会場まで真珠と一緒に来たのだ。

「・・・そうですか・・・」

松山は複雑な顔をした。蒼井は会場の前に沢山のクラブの塊がいることで、避けて会場に入らなければならない事を思い軽くため息をつき、どこから入るか辺りを見渡しながら言った。

「ま。　大丈夫だろ」

ちらっと松山は蒼井を見た。

「あーゆー子は思い知れば勝手にあきらめるさ・・・」

そう言うと蒼井も松山たちを後にして会場の入り口に向かう。

「起きろ！　サル！！　」

入り際、楓の頭をグリグリすると、楓は足をバタバタさせた。

★

会場の中もスタッフや選手、家族、コーチが沢山いる。
昨日のショートを思い通りの成績を取れなかったものの、一応トップで通った真珠は
何人もの選手たコーチに見られた。

試合の直前まで選手と動向したり、もしくは近くにいるコーチが多いが、真珠と松山コーチは、あまりギリギリまで一緒にいる事が少ない。真珠が話しかけられる事を嫌うのと、試合直前は何も言わない方が良いという松山の考え方の一致である。

更衣室に入ると真珠はすばやく着替えの準備に取りかかるべく、ロッカーを確保しバッグを開けた。そこには真珠の母親は作ってくれた衣装、化粧道具など色々なものが入っていた。真珠は上着を脱ぎ始める。

『とにかく勝つ。』

ロッカーに上着やスカートを入れ衣装を頭から着始める。手早い。

『この冬に技術面をもっと向上させ7級を取り、そして一年後に、シニアの代表として世界大会に出る。』

腰のあたりのシワをのばす。終わるとロッカーに鍵をかけ、大きな鏡張りになっている化粧席の椅子に座り舞台化粧用の箱を取り出し広げた。

『そのためには、このブロック予選、次の東日本大会を抜け、全日本ジュニアでなんとか表彰台に上り・・・全日本の強化選手に入らなければ・・・』

すこし力が入ってアイメイクを失敗した。ティッシュでふき取る。そこは14歳だ真珠はあまりこの舞台化粧が得意ではない。他の選手もほとんどが親やコーチにやってもらっている子が多い。

『かなり険しいルートだけど、可能性はゼロじゃない・・・』

薄いオレンジがかったリップクリームを塗りながら、じっと鏡の自分を見つめる。

自然と拳に力が入った。

すると鏡の中で更衣室のドアがまた開いた。

「お・・・おはよコブタちゃん・・・」

楓の声だ。真珠は振り返った

「おはよう！　やっと起きたの楓・・・キャーーーー！！！」

思わず真珠は悲鳴を上げた。楓は昨日あれから何も食べさせてもらえず、げっそりとしていた。さの様があまりにミイラのようで肌がカピカピで怖い。

辺りの人たちの視線が真珠と楓に集まった。

「な・・・なにか食べるものを・・・」

「あ、あんた昨日から何も食べてないの？」

ヒューヒューと化け物のような息使いの楓の後ろから蒼井が更衣室に入ってきた。

「蒼井さん！　これじゃいくら何でも・・・」

「あー。　忘れてた。」

蒼井は持っていたバッグの中からバナナの房を取り出した。

「はい。サル　バナナよ」

蒼井がバナナを楓に近づけるとまるで獣のようにバナナを奪い取り誰にも取られないように唸りながらムシャムシャとガッついて食べだした。

「け・・けだもの・・・」

真珠は異様な光景に呟いた。

「ほら！　メイクするから！！！　楓、シッダウン！！　」

その号令に楓は一瞬ビクッと体を硬直させ、すぐに正座した。

「おハンド！　」

楓は右手を差し出された蒼井の左手にのせた。ハァハァ言っている。

「よーしよし。」

楓の頭をワシャワシャした。

「サルというより・・・ドッグ・・・」

真珠は引きつった笑いをして2人を見ていた。

★

真珠は全ての準備を整えていたが、滑走順は一番最後だったが、準備は一番最初に終わったようだ。楓は衣装に着替えていた。”楓”の名にふさわしい赤い生地が主体でオレンジや黄色のカエデの葉がスパンコールでいくつも形作られた秋を感じさせる衣装だ。

まだバナナを食べながら鏡の前で蒼井に髪をセットしてもらっている。

真珠はカエデの隣に座って話しかけた。

「で・・・楓は今日のフリー、何を演るの？」

真珠の質問にバナナで口を頬張りながら不思議そうな顔をしている。
楓は後ろの蒼井の方に振り向く。

「先生、今日何やるの？　」
「動くな！！　」

一生懸命楓の髪型をセットしている蒼井はイラっと言葉を返しながら、バッグの中からＭＰ３の音楽プレーヤーを取り出した。

「これだよ」
「ありがとー」

楓はプレーヤーを受け取るとルンルンと鼻歌まじりで再生をする。

「わー　いい曲だねー」

楓はじっくりと曲に聴き入っている。
その光景に真珠は青ざめる。

「ま、まさか　今日やる曲、初めて聴いてるわけ・・・・じゃないですよね？」

おそるおそる蒼井に聞く真珠。また手を止められた蒼井は不機嫌そうに真珠を見る。

「初めてだね・・・たぶん　」

蒼井は口に沢山の髪留めを加えながら言った。
真珠はハッとなり気づいた。

『そうか・・・楓は迷子状態で、ずっと買えってなかったんだった・・・』

再び、視線を楓に戻す。バナナも食べ終え曲を聴き入っている楓は極めて気分の良さそうな顔をしている。真珠は鏡ごしに蒼井を見た。

「あの・・・前から、ちょっと思ってたんですけど・・・蒼井さん、ちゃんと楓にフィギュア教えてるんですよね？」

「あ～ん・・・」

蒼井はムカッとした顔で真珠に顔を向けた。

「いや・・・ちゃんとしてるならいいんですけど・・・楓がブラジル行っただのライオンと戦っただの冗談ばっか言うから・・・」

楓に向き直った蒼井はほのかに笑った。

「全部、本当だよ。　この子と世界中観てまわってる・・・」

「な・・・・」

楓の冗談だと思っていたので、真珠はビックリして一瞬言葉を失った。

「何のために・・・！　フィギュア教えてるなら　まだ理解できるけど、要素も変な名前で覚えてるし直前まで曲も聞かせてないなんて・・・」

真珠は本気で楓が心配になってきた。小さい頃から変わらないと思っていた楓だったが、１４歳の真珠と同じ歳にしてはあまりに常識が無さ過ぎる・・・

蒼井はやっと楓の髪のセットが終わったらしく満足そうに眺めた。

「なんでそんな無茶苦茶なことさせてるんですか！　この子　九九も言えないんですよ・・・」

まるで聞いてないような表情の蒼井に真珠は若干、怒った。

「この子の人生潰す気ですか！！　」

思わず大きな声で口走っていた。だが真珠にとって本気で楓を心配した本音の言葉だった。蒼井は腰に手をやり、うつむき加減で大きくため息をつく。

「余計なお世話。」

表情のない顔で冷たく言った。

「蒼井さん！！　」

「うるさい子だねー　」

頭をかきながら蒼井は余った髪留めやブラシをバッグにしまう。

「あんたさぁ・・・人の心配してる場合？　」

「え？」

蒼井はジーっとバッグのチャックを閉めた。

「たぶん、そのままじゃ　優勝なんて出来ないよ」

「・・・・え・・・・」

突然のその言葉に真珠は反応できない。僅差ではあるがショートでは1位だった。
今日のフリーだって優勝に一番近い位置にいることは明らかだ。

「なんで・・・それいったいどういう・・・」
「ほら！　この子　今日一番手なんだから　邪魔！　」

蒼井は何回も繰り返し曲を聴いている楓を立たせ更衣室から出る。
楓は曲を聴いたまま真珠に笑顔で手をふり出て行った。

『何？　なんのこと？　私の計算に狂いでも？　何か弱点でもあるの？　それとも・・・』

ふと、思いつく。３Ａ（トリプルアクセル）だ。巻き足と言われ、フラツキも目立ち、とても完成しているとは言い難いのは確かだった。しかし失点されようが、どう思われようが、３回転半回って転ばなければ認定はされる。真珠は今日も３Ａを飛ぶ気でいた。それを見透かされたのかもしれない・・・と思った。
しかし、大事な試合の前でこんなに不安になるようなことを言うなんて・・・
確かに教え子である楓は真珠の弁当のせいで食べすぎてしまい、ショートを棄権という最悪の結果で、この大会に成績は求められない状況になってしまった。

『でも、蒼井さんはこの世界のトップレベルで戦っていた人・・・上の世界ではもっとシビアでデリケートな精神的な戦いも当然あるのかもしれない・・・』

心の中でそう思いながらも真珠は蒼井のことをあまり良く思わなくなりはじめていた。

★

会場は昨日よりも観客が多くなっていた。今日は日曜で昨日よりこれる家族も増えているのかもしれない。リンクでは楓を含む最初のグループ六人の公式練習をしていた。
だが楓は人が滑るリンクで一緒に滑ること自体、かなり久しぶりなのに比べ、大会自体も初めてなのでマゴマゴしている間に時間が終わってしまう。
選手が次々にリンクから出ていくので慌てて帰ってきた。

「今の・・・何？・・・なんでみんなで滑ったの？　」

楓は不思議そうに蒼井に聞く。

「お前さぁ　教えたろ。演技前に最後のチェックでジャンプとかステップとかするって
ったく何もしないで終わらせちゃって・・・　」

少し乱れた楓の髪を直す蒼井。されるがままで楓は沢山の人が入っている観曲席を見つめていた。

〜ただいまより、東日本大会ブロック予選、関東大会　二日目　フリープログラムを始めます〜

アナウンスが会場全体に流れる。
楓はラジオ体操のような準備運動をしはじめた。

「楓！　」

真珠が声をかける。

「コブタちゃん☆」

「いい？　気楽にいきなよ？　失敗したって棄権したって何にも恥ずかしくないからね。　昨日だってしてるんだし、当日に初めての曲聴かせる方がすっごく非常識なんだから・・」

真珠は心底、楓を心配していた。

『大会を経験させるにしても酷だよ・・・いくら変人の楓だって、こんな大舞台で笑い者にされたら絶対トラウマになる・・・・』

蒼井は聞こえていたが何も言わずリンクの壁に手をつき観客席の方をぼーっと見ていた。

楓はじーっと真珠の顔を見る。

そしてニッコリと笑った。

真珠に声をかけられた事がうれしかったようだ。

楓の顔にすこし赤みが出る。

「ありがとう！　コブタちゃんのために頑張ってやるから、見ててね！」

〜エントリー1　中山　楓　さん〜

楓の出番を知らせるアナウンスが流れた。

「ほら、出番だよ　楓！」

蒼井がアゴで指図すると楓はスケート靴のブレードカバーを外し勢いよく出て行く。

『楓　』

その後ろ姿をじっと真珠は見つめた。

「あ　あの子　昨日突然棄権してモドシちゃった子だよ」

「へー　今日は出るんだ・・・ハハハ」

「ガンバレー」

観客席から同情の声と笑い声がチラホラ聞こえる。

後に控える選手達も更衣室のモニターなどで楓の演技を見ている。

昨日、あれだけ失敗した子、今日は何をやらかすか・・・こういうデリケートな戦いの中で人の失敗ほど、安心し自信をつける材料はない。

楓の次の出番の選手までリンクに近づき見ていた。

ザワつくムードの中、みんなの視線を楓はリンクの中央で止まり、ゆっくりと目を閉じた。

★

会場に曲が流れ始める。

真珠はすぐにその曲名がわかる。それは世界の大舞台で自分がやりたかった・・・

幼い頃テレビで見た冬季オリンピック、楓のコーチ蒼井桜の演技・・・

ショパン”ノクターン（夜想曲）”　第二番変ホ長調

楓はゆっくりと瞼を開けた。

曲調にぴったりのゆったりした動きで背後に滑り出す。

腕を優雅に羽ばたかせ胸にもってくると何かを訴えるかのように両手を下から天に仰ぐように持ってくる。その自然な指先までの動きが見るものに楓の表情を注目させ
その楓の切ない表情に沈黙をもたらす、同時に引き込まれる。

楓は背後の滑りから前方に向かう滑りにスイッチし左足に体重をのせた。
しかしそれは、枯葉のような重さしかないのではないかという楓の体の印象から
ただ左足を曲げ一瞬かがんだようにしか見えない。

次の瞬間、左足つま先で踏み切り跳んだ！！

空中で美しく楓が3回転半し優雅に着地した。
3Aだ。
だがその超難易度のジャンプより、切なさをを増した楓の表情。
真っ白なリンクの中の優雅で切ない表情の少女の行く末に観客は一気に魅入った。

『あっさり・・・・』

真珠は青ざめた。

『・・・・・上手い・・・・・・』

蒼井は楓の出だしを妖艶ともとれる微笑で見つめていた。

第七話（後書き）

「コブタの真珠」第七話を読んで頂きありがとうございます。
この物語は全１１話です。是非最後まで読んでくださいね！！

第八話

会場の観客の視線は完全に楓に集中していた。

その氷上の。楓のあまりの切なさが、見ているモノの胸をつかむ。

そして、楓は再び跳んだ。

３Ｆ＋３Ｔ！（トリプルフリップトゥループ）

またもや、完璧なまでの技だ。

まるでそのジャンプを祈りに変えているかのようだ。

完璧で美しいその贈り物を神に捧げても、何も答えてくれない神。

まるでそんな印象を受けるジャンプだった。

もう観ている者は技のレベルなど気にはしていない。

楓の”行方”しか観ていない。

そのまま楓は片足でスパイラルに入った。

「なんという伸び・・・なんと、しなやかで滑らかなスパイラル・・・」

審査員の一人がつい呟く。

真珠のコーチ、松山も楓の演技に圧倒されていた。

しかもそれは、やはり技の凄さにではなかった。

その表情にだ。

「なんなの・・・この”切なさ”は・・・この”寂びしさ”は・・・」

観客の一人がどこかで呟く。それは皆が感じ取っていた。
”不安　”　”寂しさ”
そんな感覚が観ているもの全員の胸に突き刺さる。
まるで、自分自身も一人ぼっちでいるような錯覚に陥る。

真珠もその一人だった。
だが、真珠の中で、ショパンの”ノクターン”は、こんな寂しく悲しいものではなかった。

「普通・・・”ノクターン”って言ったら・・この可愛いメロディーにのせて”妖精”とか”乙女”をイメージするような曲なのに・・・」

楓のそれはまるで違う・・・人生に未来があるような者の表現ではない。
明らかに楓は泣いていた。観客にはテレビカメラでズームアップでもされない限りその涙はリンクの中の楓からハッキリ見えるようなモノではない。
だが泣いているのだ。それが観客には感じられた。
その涙が観ているものの同情を誘う。

「なんでこんな”切ない”・・・まるで家に帰れない子供のような・・・・」

そんな事をつい呟いた時、後ろで蒼井が答えた。

「・・”ショパン”さ・・・・」

真珠は蒼井をチラッと見た。
蒼井は楓を目で追いつつ興奮を隠すようにあえて冷静な表情を作っているように見えた。
証拠に明らか瞳がらんらんと輝いている

「作曲者　フレデリック・ショパンは１８３０年　２０歳の時、音楽活動のため故郷ワルシャワを旅立つ。　しかし、その直後。」

真珠は心の中でショパンという人物を想像した。

「ワルシャワは革命を起こし新政府を樹立。しかしほんの数ヶ月でロシアの大群に陥落。
後・・・永きにわたりロシア帝国に属州として蹂躙されるんだ・・・」

真珠は目を見開き楓を見た。そう・・・想像したショパンが楓にしか映らなかったからだ。

「ショパンは二度と家族と会えぬまま、その短い生涯を終える・・・」

楓は大きく天を仰いだ。

「一度の視聴で感じたんだ。　楓は・・・ショパンの”望郷”を・・・」

もう会場内は楓の”切なさ”釘付けだった。

★

見入って危うく審査を忘れそうになりながら、メモを取っている審査員はその曲の解釈より別のことに注目していた。

「それにしても・・・なんという”みずみずしい”演技なんだ・・・」

松山コーチも同じように呟いた。

「普通の選手が完成された料理だとしたら・・・この子はまるで、もぎたての果実・・・」

沢山の選手を分析してきた真珠の目にも明らかに楓の滑りは異質だと感じていた。

「まるで・・はじめて見る感覚だわ・・・次に何が起きるか予想もつかな・・・・！」

はっとして、真珠はとっさに口をつぐんだ。

気づいたのだ・・その異質の正体に・・・

体が一瞬硬直しビクッと震えた感覚だった。

背後で蒼井が興奮を抑えきれない様子を感じてとれた。

待っていたのだ。　その真珠の疑問を・・・その驚きを・・・

「そんなの当たり前でしょう・・・あの子自身、その刹那、何を踊るかなんて決めていないんだから・・・」

蒼井は冷静さなど装えず、高揚し頬が紅くそして汗まで出ていた。

まるで沸々と体の中でエネルギーが沸騰し湯気が出ているようだ・・

・
長年の思いが今、実現しているのが解る。
「ずっと以前から思っていた。　フィギュアスケートは”氷上の美”の競い合い・・」
楓の演技は曲と共に佳境へ、ちいさいジャンプからスピンに入る。
「だったら、もっと思うがままに・・・
もっと感ずるがままに・・・」
スピンはやがて美しいドーナツスピンへと変化していく。望郷の思いがピークに達した。
「・・・・その感性の筆先が自由にキャンバスを描くが如く・・・・・」
その言葉で真珠の感覚の中では、楓が七色の筆とともに白いリンクの中をカラフルに描いているかのように見えた。
「圧倒的表現力・・・・・インスピレーションフィギュア！！」
蒼井の一言と同時に、楓がスピンを止めた！
汗がカクテル光線で美しく散る。
楓は両手を仰ぎ、左手を胸に右手を光り輝く天にかざした。
そして、天に向かって笑顔を見せる。
それは、天国で再び家族に会えたショパンの安堵の笑顔だった。
一瞬の沈黙。

楓はまだ、天を見ている。
やがて、・・・はぁ・・・はぁ・・・・と楓の息を整える声が静寂の中、響いた。

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァ！！！！

一斉に歓声が上がる。拍手も鳴り止まない・・・
観ているもの全員が感動に包まれた証拠だった。

松山は茫然とリンクの中で、恥ずかしそうに礼をする楓を見ている。
蒼井は、再び冷静を装い、口元だけでわらった。だが胸に組まれた腕の中で拳は感動と達成の喜びで強く握られ震えていた。

真珠は立ち尽くし、その場を動けない。
それはあまりにも圧倒的なレベルの差だった。

第八話（後書き）

「コブタの真珠」第八話を読んで頂き本当にありがとうございます。
感想、コメントなど、気軽に送ってくださいまし～
この物語は全１１話です。

第九話

パチ　パチ　パチ　パチ　パチ　パチ　パチ　パチ！・・・・・・・！！！！！

楓の演技で感動した観客の興奮はまだ冷めない。演技を終えた楓がリンクから出ようとしていてもまだ拍手が止まない。
真珠の顔からは血の気が引いている。
圧倒的な技術、演技力・・・というより、シニア選手を含め、たくさんの選手を研究し観てきた真珠もここまで凄い選手を知らない。
間違いなく楓はオリンピックに出ていてもおかしくない、それもその表彰台に乗っていてもおかしくないレベルだ。

「はぁー　ただいまー！！　」

楓が息を切らして帰ってきた。蒼井はブレードカバーを渡すと急いでシューズにつけ真珠の元に近づき手をとった。

「コブタちゃん　見てくれた！　コブタちゃんのために一生懸命、頑張ってきたよ☆」
「・・・う、うん」

真珠は答えるのもやっとだった。
楓は真珠の手を握ったまま、蒼井の方に振り返る

「先生！　お腹減った　うきー！！　」
「あーん・・・　」

蒼井はジロリと楓をにらむ、しかし、口元は緩んでいた。

足元に置いてあったバッグの中からさっとバナナの房を取り出す。

「はい。」

「えー　またバナナー？！　他のがいい！！！　」

楓はそう言いながらバナナをふんだくった。

「ほら　行くよ。」

「へ？　ほほに？（どこに？）」

「教えただろ！　結果聞く場所。　キス&クライだよ」

「ふえ～？」

楓は面倒くさそうに嫌な顔をした。

蒼井は嫌そうな楓の衣装を掴み猫のように持ち上げ連れて行く

蒼井に持たれながら真珠の方に振り返り手を振る。

「はほへへー（あとでね～）」

真珠は全身に力が入らない・・・まるで、風邪で熱でもあるかのようにグッタリと体が重い。実力の差にも衝撃だったが、それより気になるのは結果だった。

真珠の頭の中は必死に過去のジュニア大会の最高点を思い出そうとしていた・・・

｛ただいまの中山　楓さんの得点・・・・・｝

会場にアナウンスが響く。

真珠は電光掲示板に振り向いた。久しぶりに動いた気がした。

背中が冷たい・・・・見ているだけで、こんなに冷や汗をかいたのは生まれて初めてだ。

〜技術点　６３．００点　構成点　６５．６０点

トータル　１２８，６〜

ワァァァァァァァァァァァァァ！！！

再び歓声が上がる。
キス＆クライで蒼井が一人ガッツポーズをしていた。
楓はつまらなそうにバナナを頬張っていた。
真珠はヒザに力が入らなくなり一瞬ガクッと落ちた、だがすぐ立ちなおした。

「フリーだけで・・・・１２８点・・・・」

ジュニアのフリーは要素が１２個と決められていてシニアより一個少ない。それなのにシニア大会のそれも世界大会並みの成績だ。
間違いなく全ての要素が最高レベルと評価されている証拠だった。
構成点も、平均８点以上という最高評価を得ているだろう。

ジュニアの世界ではたまにこういうことが起きる。
圧倒的天才の出現。理不尽なまでの才能開花。桁違いの点数を叩きだす新人選手が突然現れることがある。
あのＭ・Ａ選手もそうだった。
彗星のように現れ、桁違いの成績で優勝を重ねていった・・・

そして、なんとなく真珠には予感のようなモノがあった。
サルの気持ちを理解するために行き倒れた楓。
小さい時から、ちっとも変わらない楓。

曲を聴いて人目も気にせず踊りだす楓。
楓は自分と、いや普通の人とは違うということが。
重い足をひきずって真珠は控え室の方に向かう。
『完全に計算が崩れた・・・』
更衣室に入るとすぐにいつも持ってきているネットブックを取り出し開く。
自分の予定要素数パターンと点数を出した。
『私のフリープログラムの予想スコアは７５点台・・・未完成３Ａ（トリプルアクセル）や、まだ成功率の低い３Ｆ＋３Ｔ（トリプルフリップトゥループ）に成功しても８０点くらいだ・・・ショートの得点４０点と合わせても１２０点。楓には８点足りない・・・どうしたら・・・』
今から自分が出来る技の並べ替えでなんとか１２８点を超えられないか・・・
ルール上では、後半で出す要素は１．１倍になる。真珠はパソコンの画面上で何度も何度も並べ直す。
『どうしたら・・・１２８点を抜ける?!・・・・』
カシャカシャと誰もいない更衣室の中でキーを叩く音が響く。
★
会場では大会は進み次々に選手が演技をしていた。
だが、一番手の楓の演技の後で観客席はかなり静かになっていた。

その観客席の中で真珠の所属するクラブが固まっている席で
松山コーチは真珠の用意した予想と結果を照らし合わせていた。

「やっぱり・・・・」
「？」

他のコーチが松山の呟きに反応して目を向ける。

「真珠の予測が外れてる・・・・今まで、ほぼ百発百中という位だったのに・・・」
「え！　うそ・・・」

松山の持っている予想の紙を隣から覗く。

「！　」

その時、現在してる子が突然ジャンプをミスした。

「あの子も・・・」

松山の額から一筋、汗が流れる。明らかに熱いからかく汗ではない。

「前の子も、その前の子も・・・自分のスケートを見失って、失敗の連続だわ・・
みんな真珠の予想よりかなり低い・・・」

予想の紙を下ろし、眉をひそめ観客席の一角にある階段の壁に寄りかかり他の子の演技を見る蒼井桜とその後ろでつまらなそうに。まだバナナを食べている楓を見た。

「この大会・・完全に壊されたわね・・・・中山　楓に・・・・蒼井　桜に・・・・・」

★

（やっぱり・・・こうなったか・・・）

蒼井　桜は腕を組み壁に寄りかかったまま、大失敗を繰り返す選手達を横目で見ていた。

（”私達”のやったフィギュアは完璧な技術力の上で成り立つアドリブ・・・
楓はまだ短いながらも人生のほぼ全てをフィギュアスケートと感受性を育てることにあてている。）

演技を終えた選手がまた失敗で泣きじゃくりコーチに抱きついている。

（こんな発展途上の子供達の前で、披露すべきではなかった・・・）

蒼井は組んでいた腕で自分の肩をぎゅっとしめ、視線を地面に向けた。

（・・・というより・・・・・もう見せるべきではないのか・・・）

大きくため息をついた。

（競うべき相手がいない・・・・）

足もとでバナナを食べている楓に目をやる。
（今ならまだ。　この子を普通にできるかもしれない・・・）
ほのかに蒼井は口をゆるめ、笑みを作った。
「楓、何食べたい？　」
楓は嬉しそうに振り向く。
「え？！　外食？　ホントに！？？　」
楓は鼻息を荒くうっとりとしてヨダレをたらした
「松坂牛・・・・」
「無理！！　どこで覚えたそんなもん・・・」
楓は口をとんがらせてブーイングをする。
（私の理想をこの子に押し付けた責任は・・・取らなければ・・・・）
すねている楓を見ながら、強い決意を瞳に宿らせる蒼井だった。
そしてまた、次の選手がリンクに入っていった。
★
更衣室。
ジーっとネットブックの動作音だけが響いている。
化粧道具が置かれる筈のテーブルにはクシャクシャになったメモら

しきゴミがいくつも
転がっている。
パイプ椅子に座り、手をぶらーんとさせ、だらしなく背もたれに寄りかかり虚脱しきった
真珠が鏡の前の自分とずっと視線を合わせていた。
その顔は異様なほど白い。

『無理だ・・・今の私では、どうやっても届かない』

朝、練習したきり、スケート靴を履いたままだ。

『このまま2位通過しても、仮に東日本大会を抜け全日本大会に出場出来たとしても楓がいるかぎり、表彰台に上がれるのは残り2人。去年までのデータを見ると私の最高点でギリギリ4位。しかも他の選手も確実にレベルアップしてる可能性が高い。・・・なんとか一年以内に7級を取れてシニアに行けたとしても、もっとレベルの高い戦いが待っている。しかも今の混戦状態のシニア界で、グランプリシリーズに選ばれる新人の枠なんて一人がいいところ・・・
・・・・・・・・・・・・私にはもう取れる椅子は・・・・・・・ない』

真珠は静かにネットブックを閉じた。

★

会場の階段の壁に寄りかかりしばらく大会を見ていた蒼井は楓と共に足元に置いてあった大きなバッグを持ち上げた。そこには楓の着替えなど全てが入っていた。

「よし、忘れ物はないね？」
「え？　」

楓は座ったまま驚いて蒼井の顔を見た。
「もしかして、先生・・・帰る気？　」
「メシ、食べにいきたいんだろ？　」
蒼井はあからさまに面倒くさそうに眉間にシワをよせた。楓と視線を合わさない。
「ダメだよ！　まだコブタちゃんの見てないもの。　昨日見逃しちゃったし・・・」
楓も眉をひそめ口をとんがらせて言った。
一瞬、楓を見てすぐ横の方に視線を移す蒼井が答えた。
「もう今日はまともな演技の出来る子なんていないよ」
「？　ウキャ？（※サル語　なぜに？）」
イラっとした蒼井は楓の右手首を掴み、強引に立たせようと引っ張った。
「とにかく行くんだよ！　」
「やぁ～だぁ～！！！！　」
ズズっと体の軽い楓が動く。その瞬間、楓は思い切り掴んでいる蒼井の手に噛み付いた。
「痛！！　」
「フ――――――――――――！！！　」

獣のように髪の毛を逆立てて威嚇する楓。
蒼井は噛まれた手を摩りながら楓をにらみつけ、そしてまた視線を外した。
そして、大きくため息をついた。

「じゃあ、はっきり言うけど・・・・」

ドスンっと重そうなバッグを一度、床に下ろした。

「あの鈴原真珠って子、ありゃダメだよ。」

蒼井は不機嫌そうに更に眉間にシワが寄った。

「発育が早いとか、そんな事だけじゃない。　勘が悪い。悪すぎる。３Ａ（トリプルアクセル）は特別にしたって、他のジャンプだっておそらく相当練習しないと跳べなかったはずだ。自分の体の重心やら軸やらの感覚が希薄なのさ。そういうのはある種、感覚で跳ぶもんなんだ。アンタみたいにね。　それに、１４歳で６級持ってる子が昨日見た限りじゃ３回転もおぼつかない。確実じゃないから、皆跳ばないだけで、成功率７０％くらいの３回転は皆、いくつか持ってるもんだ。たぶん、あの子は一つもない。ギリギリ、トゥループでいけるかどうか・・・・はっきり言って才能が無い。　」

蒼井は一度も楓と視線を合わさず言い切った。
”コブタ”の名は今まで楓から何度も聞いていた。楓にとって真珠がどんなに大切に思っている友人か、蒼井にはわかっていた。
だから、こんな台詞を本当は言いたくなかったし、それを聞いた楓の顔も見たくなかった。

「可哀想に。あのコーチが無能なのさ。発育の事といい、感覚のこ

とといい、
あのコーチは大事なことを、おそらく解っていて言わなかった。もっと他の育て方もあったろうに・・・それにもっと早く言っていればもっと早くあきらめられていた。」

楓はアグラの崩れた格好で両手に地面を手をつき、茫然と聞いている・・・
・・・・と思ったら、突然、ふきだした。

「プ――――――!!! ブハハハハ 」
「な、何笑ってんだよ!! 真剣に話してんのに! 」

笑い出した楓をやっと蒼井は見た。

「だって・・・・プハハ・・・当たり前なんだもん・・・」
「あ? 」

蒼井は楓を見て驚いた。
楓は笑ってなどいなかった。、今まで蒼井が見たことのないような顔だった・・・

「昔から、トロくて、太ってて・・・いつもみんなから、『いつ辞めるの?』、『お前には無理。』って言われてて・・・いつも泣きべそかいてて・・・」

その頬は少し赤らみ、すわったような目つきでぼんやりと会場の方を見つめていた。
大好きな友人を語るような表情ではない・・・それは不安と情熱が絡み合ったような表情。

「でも・・・”居る”の。　なぜかいつもコブタちゃんは、そこに居る。」

楓の表情は明らかに”ライバル”を見ている顔だった。

「いつも不器用に、いつも泣きそうに、コブタちゃんは”そこ”居る。

いつも”りんく”の上にいるの・・・」

蒼井には楓の言っている意味がよく解らなかった。

第九話（後書き）

「コブタの真珠」第九話を読んで頂きありがとうございます。
いよいよ佳境に近づいてきました。
この物語は全１１話で完結します。
是非、また読みにきてくださいね！！

第十話

会場では相変わらず、楓のせいで調子を崩した選手の演技が続いている。

だが、大会も佳境に入っていた。
前日一応トップだった真珠の出番は最後だったが、そろそろ準備しなければならない。

松山コーチは真珠を呼びに一緒に見ていたクラブの子やコーチに一言いってから、観客席から降りた。階段を通りすぎ、関係者以外立ち入り禁止の廊下に、コーチ証を見せ入る。
リンクの入り口に向かう方角の廊下の先には演技に失敗した子がまだ泣いていて、コーチがなぐさめていた。
それとは逆の方向に更衣室兼、控え室がある。松山は足早に向かい、更衣室の前でドアに手をかけたまま止まった。

そして目をつぶった。

「お願い・・・・」

ギュッとノブを握り締め一気にドアを開けた。

「真珠。そろそろ出番よ・・・」

真珠は・・・・寝ていた。
まるで教室で坐りなれた席でつまらない授業を聞いているように・・・
組んだ腕に顔をうずめていた。

松山の声にゆっくりと首をもたげる。

「あ・・・もう、そんな時間・・・・」

だるそうに目の前に散乱した自分の荷物を片付け、ロッカーにしまう。

「・・・・・」

松山は何も言わず、真珠が廊下に来るのを待った。

真珠は首をゆっくりと回し、背中で両手を組むと器用に柔らかな肩を回しながら廊下に出た。

松山は丁寧にドアを閉じた。

「楓ちゃんに勝つ計算・・・・してたの？」

松山はリンクに向かう真珠の後ろについて、地面を見ながら聞いた。

「ええ・・・単独3回転ジャンプを2種類と3回転＋2回転＋2回転のコンビネーションでステップ・スパイラル・スピンでレベル4もらったら、130点もらって圧勝ですよ！ハハハハハ」

真珠は大きな声で笑った。体の芯にも心の芯にも力が入っていないそんな乾いた笑い。

着ているコートの裾をギュッと松山は掴んだ。我慢する時の彼女の癖だった。

暗い廊下を抜けリンクの入り口が近づくとやけに白く眩しい。

松山には真珠のシルエットしか見えない。
その辺りで真珠は一瞬、立ち止まった。つられて松山も止まる。

「松山先生・・・・」
「・・・？・・・・」

少しかすれたような小さな声。

「ありがとうございました。」

そう言うと真珠はまたリンクの方に歩いていった。
松山は硬直した。
このタイミングで言うこのセリフ・・・
松山ははじかれたような表情をしたまま、唇をかみ締めた。
更に強くコートの裾を握り締めた。もうシワだらけだ。
無言のまま、光の中の会場に入っていった。

★

真珠と松山がリンクに着くと、もう真珠の前の選手は演技を追え、その子の応援者たちからの拍手につられ、会場がまばらな拍手を送っていた。次の選手は普通、すぐに交代でリンクに入る。
真珠は慌ててスケート靴のブレードカバーを外し松山に渡し、氷の上に乗った。

氷のコンディションを確かめつつ、ゆっくりと大きな円を描くようにリンクをまわる。
ヒンヤリとした空気の風が真珠の頬を通り過ぎる。

前の子の結果がアナウンスされ、電光掲示板に数字が出た。

真珠はその掲示板を見もせず、おおきく深呼吸をして腰に手をあて、演技のスタート地点にゆっくりと味わうように向かった。

『ああ・・・・ねたましい・・・・・』

真珠は光り輝く天井の照明を見つめた。

『私にもっと才能があったら・・・・私にもっと時間があったら・・・・』

まわりを見渡す。

リンクがいつもより広くそして白く見える。

いつもは審査員の位置を確認し、光の加減で少しでも明るく綺麗に見える場所まで確認している。だが、今日はちがう。

真珠は観客席の方を見た。　所属するスケートクラブの面々とその近くに真珠の両親がいた。

『あ・・・珍しい。　お父さん今日は来てたんだ・・・・いつも仕事でお母さんだけなのに・・・・』

両親を見てニコッと笑った。両親も真珠の笑顔に反応して手を振った。

『良かった・・・・・最後に生で見せられる・・・・』

両手を地面に向かって広げ、右足のつま先を立てた。

目を閉じ、集中を始めた。

・・・・・・まわりの雑音が消えていく・・・・・・

そうしてじっと曲がかかるのを待つ。

★

関係者入り口から楓は蒼井の左手を引っ張ってリンクの壁に近づく。
蒼井は嫌そうに引っ張られている。

「ちょっと・・・どうしても見る気？　だったら、控え室で待ってるよ私は・・・」

リンクの壁際につくと楓は、戻ろうとする蒼井の左手を胸の辺りでギュッと捕まえて離さなかった。
わくわくとした楓の顔と連動するように鼓動も伝わる。
蒼井はため息をついて観念した。

アナウンスが会場中に流れた。

「エントリー２３番　鈴原真珠さん」

会場中の観客が口をつぐんだ。しかし、それはマナーであって期待を持った静寂ではなかった。今日、最初の演者、楓の演技を見てしまった観客は、自分の応援する選手でさえ退屈で仕方なかった。しかも、皆がみな、調子を崩し失敗の連続・・・
”あと一人で終わる”
明らかに。あと3分３０秒が経つのを待っているだけの静寂だった。

★
♪
ピクッ！

真珠が小さな反応をした。と同時に曲が流れはじめた。
グイグイと肘を背中の方に曲げ何か見えない塊を押すように真珠はザッと勢いよく前方に滑り出した。
蒼井は真珠の滑り出しより、音楽に反応した。
（この曲・・・”カヴァレリア・ルスティカーナ”・・・悲劇の愛の戯曲か・・・）
ぼんやりと曲名を思い出した。
★
松山はコーチの同僚、相沢と共に壁際で真珠の滑り出しを見ていた。手には真珠の演技予定表を握り締めていた。
「真珠に”ありがとう”って言われた」
「え・・・それって・・・」
「・・・・」
演技表が更に歪む。松山の手がまた強く握ったからだ。
「予定だと、最初は２Ａ（ダブルアクセル）・・・・」
松山は呟く。
（・・・・真珠・・・・）
祈るように心の中で真珠に声をかける。

「でも、松山は止めてたけど、昨日真珠は３Ａ(トリプルアクセル)跳んでるよ？　もし跳べば評価は低くても基礎点は断然高いはず・・・」

相沢は例え止めたとしても真珠が言うとおりにするわけない。そう言っているのだ。

真珠が後方から前方に向きを変えた。

（真珠！！　）

松山の祈りと共に真珠は跳んだ。

１回転、２回転・・・

ジャッ！　っとした音と共に綺麗に着地に成功した。

「ああ、２回転にしてきたか・・・やちゃえばよかったのに・・・」

相沢は拳を握り締めて悔しがる。

松山は何も言わず真珠の演技を冷静に見守ってる。

「次は？」

「２Ｆ＋２Ｔ(ダブルフリッダブルトゥループ)」

相沢の問いに素早く答える松山。

その２人の言葉が聞こえるぐらい位置に楓と蒼井もいた。

ドキドキしている楓と違い、蒼井は完全にあわれんだ表情で見ていた。

真珠は予定表に書かれている通りに２Ｆ＋２Ｔ(ダブルフリッダブルトゥループ)を跳んだ。

そのまま、フワッと跳んだかと思うとスピンを始め回転したまま片

手で上げた片足のブレードを背中で持ち上げ美しくスピンを魅せる。
そのスピンも全く変哲のない今までのスピンだった。

（なるほどね・・・）

蒼井は真珠の演技を見て確信した。

（どうやっても、楓の得点に届かないと悟り、もう無理して上のレベルのジャンプやスピンに挑戦する気さえ失せた・・・・完全に勝ちをあきらめたってことか・・・・）

だが、その時だった。

「・・・よし・・・・」

蒼井は少し離れた所での小さな小さな呟きを聞いて、そこに目をやった。
松山だった。
その、まるでパッしない松山の横顔は、なぜかうっすらと微笑がこぼれている。
蒼井はその不可解な表情に眉をひそめた。

「うーん 」

真珠の演技はスパイラルに入っていた。
審査員達も眉をひそめ、不思議そうな顔をした。

「高レベルの要素こそ少ないものの、なんと美しく安定感のあるスパイラルだ・・」

身を乗り出した審査員もいた

「先ほどのスピンもそうだったが・・・よほどの練習をこなさなければあんな安定感は出ない・・・まるでお手本のようなディープエッジな滑りだ・・・」

「何度か、他の大会でこの子を見かけたことがあるけど、もっと挑戦的な雰囲気だったわ、今日の演技はなんて・・・」

他の審査員達もみな同じように思っていた。

「なんと・・・・”けなげ”な・・・・」

★

蒼井は楓が抱えて離さなかった手を引き抜き腕組みをした。そして無意識に組んだ腕の中で手を強く握る。

（なんなんだ・・・この違和感は・・・）

じぃっと真珠の表情に目をこらす。その瞳は明らかに目の前にある何かを全力で追いかける人間の瞳だ。

（なぜ・・・そんなに必死な・・・とても勝負をあきらめてる者の表情ではない・・・

なぜ?！　絶対に勝てないのに！　）

その時、楓が壁からリンクに乗り出し呟いた。

「すごーい　コブタちゃん。完全に曲にシンクロしてる・・・」

「！」

蒼井は何かに気づいたように楓と同じように身を乗り出した。

「・・・まさか・・・・・」

真珠は大きく手を広げ、またジャンプをした。
その必死の表情。必死の演技、そしてその安定感・・・・
もはや、退屈しているものなど、誰もいなかった。

「・・・・まさか・・・・！」

蒼井は・・・いや、審査員達にもそして観客もみな感じた。
その安定感に裏打ちされた演者の練習量を・・・いや・・・・人生を・・・

”この子はこのために生きてきた”

誰もが真珠を応援したくなるような気持ちになっていた。

ブルッ・・・！

蒼井は逆毛が立つような電気が走ったような感覚を背筋に感じた。
そして、まるで恐ろしいものを見るように松山の方を見た。

演技表など、もうクチャクチャに握り締め松山は真珠を念じるように祈るように見つめている。興奮を押さえながら・・・

・・・まるで自分が演技しているように全身に力を入れながら。

（まさか・・・これを狙っていたって言うの?！）

蒼井は視線を真珠に戻した。

曲は佳境に入っていた。真珠も最後のステップに入っていた。

蒼井の鼓動は早鐘のように打っていた。

「・・・ピエトロ・マスカーニ・・・」

小さく震えながら、呟いた。

第十話（後書き）

「コブタの真珠」第十話を読んで頂きありがとうございます。
いよいよ次回最終回となります。　真珠はどうなるのか！？
ご期待ください！！

最終話

『毎朝　４時に起きた　』

始発のバスの中から見た風景を思い出す。
薄暗い朝もやの街・・・　まばらな駅のホーム・・・

『いつもダイエットで空腹に耐えた　』

技が出来るだけではダメなのだ・・・見た目もフィギュアには重要なポイント・・・
太りやすい自分の体をコントロールするため過剰な調整、ダイエットもしてきた。
例えコーチや両親に止められても自分の信念に従った。

『平日も休日もなかった　』

親友なんていなかった。　遊びに誘われてもいつも断ってきた。
寂しいと思ったことなんてなかった。
だって少しでも時間を無駄にしたくなかった。
　いつでも氷の上にいるつもりでいた。
そのために、必ずポニーテールで暮らしてきた。
毎日、毎分、毎秒、その時間の積み重ねに曜日なんて関係なかった・・・

『全ては・・・・・』

真珠は最後のジャンプ　”２F（ダブルフリップ）”のため、右足のつま先で踏みきり跳んだ。

お母さん、お父さん、松山コーチ、クラブのみんな、審査員、会場の観客、スタッフ
そして楓、蒼井桜・・・この会場にいる全てに人間がリンクの上のたった一人の選手、
真珠をを見つめていた。

『全ては　この一瞬の”美しさ”のために！！　』

美しく、そして完璧な着氷だった。
何百回も何千回も練習したであろう、その演技は真珠の人生１４年間そのものだった。
そして、曲のピリオドと共にリンクの中央で止まり大きく両手を天にかざした。

見ている者にはまるで真珠から熱気のようなオーラのようなものが出ているかの錯覚に陥る。かざした手の勢いで汗が頭上に飛んだ。
照明できらびやかに光るその水滴がスローモーションで漂っているように真珠には見えた。

「はぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・」

熱い息を大きく吐いた。

『これが・・・・私の全部・・・』

天を見つめている瞳から涙をこぼれはじめる。

『・・・・・・・・・終わった・・・・・・・・・』

この瞬間、真珠のフィギュアスケート人生が終わったのだ。
涙が止まらない。
ゆっくりとかざした手をおろしながら涙をぬぐった。
そして、回りをうかがった。
会場は静かだった。

『歓声も・・ない・・・か・・・』

無理もない。楓の高度な演技に比べ、難易度の高い技は皆無だった。
真珠はそれでも微笑を浮かべ見てくれた全ての人にお辞儀をした。
何度も。

パチ・・・

お辞儀で下を向いた真珠の耳に拍手の音が小さく聞こえた。

パチ・・・パチ・・・

「え？　」

顔を上げ会場を見渡した

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ
パチパチパチパチパチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

堰を切ったような拍手の洪水が起こる。
立ち上がっている者もいる。涙している者もいる。
目の前で繰り広げられた、たった３分３０秒に凝縮された真珠の１

４年間の人生の演技を称えた拍手だった。
真珠は訳がわからず茫然とした。

「あれ・・・私の娘なんです。　私の娘なんです！！　」

真珠の父はまわりの喋ったこともない人達に泣き笑いながら真珠を指差して自慢した。母もうっすらと涙をためて、拍手した。

真珠は意外な数の拍手に驚き再び大きくみんなにお辞儀をして帰っていく。

★

ガン！
蒼井はリンクの壁を叩いた。

「・・・ピエトロ・マスカーニ・・・」

楓は大きく拍手をしながら蒼井を見た。

「おそらくコブタは”ピエトロ・マスカーニ”の情熱を表現したのさ。」
「マスカ・・・　？　」
「マスカーニ。　１９世紀末の作曲家さ。」

蒼井は腰に手をやって、帰ってくる真珠を見つめた。

「パン屋の息子に生まれながら音楽家にあこがれたマスカーニは幾度も挫折を繰り返し苦労の末、たった一度その実力を出し切った渾身の一曲を書き上げ、時代の寵児とまで言われるまでになったんだ」

楓は拍手を止めた。

「そして、その曲こそが・・・
”カヴァレリア・ルスティカーナ”　今の曲のことさ。
おそらく引退を決意しコブタは自分の全てを出し切ることに専念した。それが曲の持っている作曲家のオーラと見事に一致したんだ。」

蒼井の額にはうっすら汗が出ていた。その汗は興奮というより、恐怖の冷や汗と言った方が正しい。その証拠に未だに細かく蒼井は震えていた。

（自分も知らないうちにね・・・・・）

蒼井は唇をかみしめ、真珠を待つ松山の横顔を見た。

（あのコブタのコーチのなんとかって女。とんでもない策士だ。
おそらく、他のコーチもコブタの両親も全く気づいていない。
私だって今の演技を見るまでは、コブタを努力家の凡人だと思っていた。）

腰に当てている拳を再び強く握った。

（コブタは凡人なんかじゃあない。
いくら練習したところであそこまで安定感のある演技が出来るものじゃない。
あのまるでブレードまで神経が通っているようなディープエッジは天性のものだ。
おそらく、コブタは幼い頃から楓並みのセンスを持った天才だった。
だが、あのコーチはそれを封印したのだ。

理由は解る。

コブタは、異様なまでに貪欲だ。それは３Ａ（トリプルアクセル）を隠れて練習する姿でもよくわかる。インラインスケートを改造し地面で練習しようなんて普通はしない。

先を急ぎすぎ、技術とクリアにこだわるコブタをそのまま育てれば薄っぺらな技術しか身に付かない所で満足し引退してしまっていたかもしれない。

そんなコブタを上手く育てるには、本人、まわりも含めて全員に”凡人”として接し少しずつ上手くなる面白さを味あわせていったのだ・・・。

自分を”凡人”として認識したコブタは努力を積み重ね少しずつ、少しずつ・・・着実に小さな”好き”を”完璧”に変えていった。まるで太く歴史の刻まれた桜の大木のように育ちそして、満開の花を咲かしたんだ。）

蒼井が血が出そうなほど下唇を噛んだ。

（１０年・・・・コブタがいつフィギュアを始めたかなんて知らないが、

おそらく１０年近く・・ずっと・・・ずっと・・・あのコーチは、まわりをだまし続けた。いつも引退ぎりぎりの決意の元で飛躍的にコブタの技術を伸ばしてきた。

たぶん今回も私が言わずとも何らかの形でコブタがもうすぐ急激な発育が来ることを伝え引退の決意をさせ、精神的に追い詰め自分の人生の悔いを残さないような演技をさせることで、本当の”表現力”を引き出すつもりでいた・・・・

私が全部言ったことは、かえって好都合だったのだ。）

★

拍手の洪水の中、真珠はリンクの出口に到着した。
松山はブレードカバーを真珠に渡しスケート靴にカバーをつけると、こらえきれず
真珠を抱き寄せた。

「先生・・・？」
「よくやった・・・本当によくやったわ・・・」

松山は真珠の両肩に手を置き真珠の目を見つめた。
松山も泣いていた。

「今の。今の”全部出す”感覚を忘れちゃだめ。」
「・・・・・でも・・・私もう・・・」

その時、楓が走ってきて真珠に抱きついた。

「コブタちゃん！！　すごーい！！　やっぱりすごい！！　思ったとおり！！　」
「楓・・」

その後ろから、蒼井がゆっくりと歩いてきた。その顔は怒りに満ちている。

「な・・・なんか蒼井さん怒ってる？　」
「あー先生はアル中で負けず嫌いだから・・・」
「誰がアル中だぁー！！　」

楓のコメカミをゲンコツでグリグリと閉めると　ギャーと叫びながら魂が抜けたように床に落ちる楓。そんな楓を無視して蒼井は真珠をキッ睨んだ。

「このアタシに勝ち逃げなんて許さないよ」

「・・・・勝ち逃げって・・・だって、優勝はたぶん・・・・」

真珠は蒼井の言っている意味が全くわからずキョトンとした顔をしている。

蒼井は松山の方に視線を移した。

「ふん・・・上手くやったね。　アンタの作戦通りなんだろう？

才能のことも、マスカーニのことも。だが、技術の上ではまだまだ、楓の方が何枚も上手だからね。」

蒼井は完全にコーチとして敗北を感じていた。

真珠の大木のようなフィギュアスケートに比べれば、どんなに美しくても楓の演技は薄っぺらい一輪の花にしか感じない。

松山は複雑な表情を浮かべつつ真珠の肩を再び抱いた。

真珠は何のことかわからず、２人の顔を交互に見ていた。

松山は、間をおき言葉を選ぶように言った。

「蒼井さんは、なにか大きな勘違いをしている・・・・」

「？　」

蒼井は睨みつけるような表情から眉を上げた。

「私はただ・・・・・そう・・・伝えたかった。

フィギュアスケートの選手寿命というのは本当に短い。でも、その

中で人生で大切なことを私はこの子に伝えたかっただけです。」

松山は優しい目で真珠を見た。

「”全力を出すこと”　こと１０代のこの子達において大事なことは結果じゃない。自分の力をどれだけ出せるようになるか。それが一番大事なことなのよ。」

「・・・・・・・」

蒼井は無言のまま一度舌打ちをした。そして、また睨みつけるような目で真珠を見た。

「今、この国のフィギュアスケートは完全にスポーツだ。　やれ３Ａ（トリプルアクセル）だの、４回転ジャンプだの、ポイントにつながること勝つことばかり注目する。テレビ中継に至っては、解説がうるさくてじっくりその子の演技を見せる気なんて、さらさらない。

・・・技術も勝利も大事なことさ。でもさ、本当わさ・・・・」

蒼井は誰も居なくなったリンクを見た。

会場はさすがに拍手が終わって、真珠の得点表示を待ってザワザワとしている。

「”美しさ”。　”氷上の美しさ”を競うものなんだよ。フィギュアスケートは。

選手はみな、アンタだって、それを求めてやってるはずだ。

だが、それでも注目されるのは技術のことばかりなのは・・・結局、今の選手が見せきれてないってことなのさ・・・本当の”美しさ”を・・・

今はまだ、この国に世界のトップを狙える選手が何人もいるからいい。でもその子達がいなくなったら、またフィギュアスケートはマ

イナーなイメージに逆戻りしてしまうだろう。　ただでさえ続けるのに障害が多い競技だ。それにフィギュアの華はやはりアマチュア選手の演技にかかっている。」

蒼井は突然真珠の肩を掴んだ。
あまりの迫力にビクッと真珠の体が震えた。

「いいかいコブタ。　絶対に上がってくるんだ。　その”才能”を埋もれさせちゃだめだ！　」
「・・・さい・・・のう・・・？」

真珠は耳を疑った。　自分に対し初めて使われた言葉だったから・・・
ずっと言って欲しかった言葉だから・・・・だが才能があると言って欲しかったわけじゃない。真珠の目にはうっすらと涙がにじんでいる

「でも・・・あたし・・・もうすぐ成長して重心が・・・」

松山が真珠の頭をなぜた。

「・・・・そう・・・だから私は、今まであなたに3回転を教えてこなかった。
体の感覚が変わってしまえばまた、全部やり直しかもしれないから・・・でも・・
それから。成長の落ち着いたところで全部最初から、そしてその時こそ次のステップへいこうと思っていた。きっと、あなたなら出来る。」

真珠は衣装のスカートの端を思い切り掴んだ。

『・・・・いいんだ・・・・』

涙は頬を伝い、鼻水まで出てきた。

『まだ・・・ここ（リンク）に居ていいんだ・・・・』

松山がハンカチで鼻水をふいてくれた。
その時、場内で結果を知らせるアナウンスが流れた。

﹛ただいまの演技の得点・・・・﹜

全員が電光掲示板を見つめた。

﹛技術点　４８、１０
構成点　５０、８０

鈴原真珠選手の得点・・・・・９８，９０！﹜

ワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
ァァァァ！！

会場が沸く。

再び、拍手が起こった。

真珠は自分の予想を大きく超えて、構成点を伸ばした。
そして、トータルで１３９、４点というスコアで、楓の１２８点を上回ったのだ。
松山はまた真珠を抱きしめた。

蒼井は、目の前で歓喜する真珠と松山に小さめに拍手を送ると足元で失神している楓を脇に持ち上げ重そうな荷物も同時にしょった。

「じゃあね。　そろそろアタシらは行くよ。」

「え　表彰式は・・・？」

真珠の問いかけに蒼井は目をあわさず答えた。

「あたしわね。もう”銀”には興味がないんだよ。」

そう言うと、関係者通路の方に足早に去る。

真珠は蒼井に抱えられた楓のおしりを見ながら、軽く微笑んだ。

『またね・・・楓・・・・・』

そして楓が、もしショートをちゃんとやっていたら・・・という事を少し想像した。

おそらく史上最高点で優勝だったろう。

でも・・・不思議だった。前ほど、その実力の差が恐ろしくなかったからだ。

真珠は拍手する観客たちをもう一度見て、そしてお辞儀した。

『いいんだ・・私はまだリンクに居られる。そこで”全力を出す”・・ただそれだけだ』

拍手は長く長く鳴り止まなかった。

その音は通路にも響き渡る。

蒼井は面白くなそうな顔で足早に歩いた。

「・・・・先生・・・・・」

失神して抱えられていたはずの楓が呟いた。

「なんだ、やっぱり失神なんてしてなかったね　このサル娘！　」

楓は自分で蒼井の脇から降り、蒼井の腰に抱きついた。そして明るいリンクの方を振り返る。

「・・・先生・・・私、もっと上手くなりたい・・・もっと・・・もっと・・・」

「・・・・・」

蒼井は松山の言葉を思い返した。

そして、自分がいかに、今しか見てないことに気がついた。

楓の人生はまだまだこれからなのだ・・・・そして自分の人生も・・・

「・・・ああ。　頑張ろうな・・・・・　全力で・・・・」

蒼井も再びリンクの方を振り返り、楓の頭をなぜた。

その時、楓のお腹の音が鳴った。

「そういえば・・・今日外食ですよね？　なに？　松坂牛？　ステーキ？」

らんらんと輝く楓の瞳にガンを飛ばしつつ舌打ちをして、蒼井は無言で出口の方に歩きはじめた。

「ちょっと、先生！！　さっき言ったじゃん！　約束じゃん！　」

蒼井の後をブーブー言いながら楓がついていく

「うるさい！」

「せぇんせぇ～！！」

2人はゴチャゴチャと言い合いながら会場から姿を消した。

★

3月。

まだ、うす寒い朝に始発のバスが住宅街の中のバス停で待っている。

運転手は時間を気にし腕時計を何度か見た。出発時間が迫っている。

「ごめんなさーい」。

バス停の先の信号を渡って女の子が走ってくる。

まだ春休みだけあって、今日は私服だ。バスの入り口のステップを駆け上り、定期を読み取り機に当て、チャラーンと反応の音がする。

「おはよう！　なんかまた、大きくなったね」

「おはようございます！　育ち盛りですから・・・」

女の子は息をきらしながら、いつもの一番前の席に座った。

バスはドアを閉め走りだす。

カバンの中から去年のスポーツ新聞を切り抜いたファイルを取り出した。

そこには、大きく

”フィギュアスケート日本選手権ジュニア大会。歴代最高得点優勝

天才現る！！”

という見出しがおどっていた。

その記事に写っている子は表彰台の上でバナナを持っていた。
記事を見ながら女の子は真剣な表情をした。気合を入れるためのモノなのか、いつも儀式にしているらしい。

「おお　キレイだなー　」

不意に運転手が女の子に聞こえるように呟いた。
バスの外は満開の桜並木が散り始めヒラヒラとピンク色の道を演出していた。

「・・・でも桜って。せっかく咲いても散っちゃうんですよね・・・」

女の子は切ない表情で窓の外を見て言った。
運転手は聞こえなかったのか無言で次のカーブに備えてハンドルを持ち直した。

女の子はファイルをカバンに閉まった。
車内にアナウンスが響く。

〔次は縦浜駅西口。　縦浜駅西口。お降りの際は忘れものにご注意ください〕

女の子はボタンを押した。
バスはゆっくりと駅の脇の銀行と花屋の前のバス停にとまった。
ドアがプシューっという空気の音と共に開き、女の子が荷物を持って再び定期を機械にあてた。

「でもね。桜はまた咲く。去年より大きくキレイになってね。」

運転手は前方をぼんやりと見ながら独り言のように言った。
女の子はニッコリと微笑んだ。

「行ってらっしゃい。」
「行ってきます！！　」

元気よく、勢いよく女の子はバスを降り、駅の階段に向かった。

また　満開の花を咲かせるために。

＜おわり＞

最終話（後書き）

「コブタの真珠」最終話を読んで頂き本当にありがとうございます。
また最後まで読んでいただいた方、本当に感謝しております。
つたない文章だとおもいますが、感想など頂けたらもんどりうって
喜びますので
よろしくお願いします。　次回作も鋭意構想中です！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7507i/

コブタの真珠

2010年10月10日14時19分発行